

アルケイアー記録・情報・歴史  
第二号 二〇〇八年三月 一二七―一八二頁  
南山大学史料室

ハインリッヒ・ブツシュの  
「東林書院とカトリック教会」

葛谷 登

---

Annotated translation of  
Heinrich Busch's "The Tung-lin Academy and the Catholic Church"  
KUZUYA Noboru

*archeia: documents, information and history*  
No.2 March, 2008 pp.127-182  
Nanzan University Archives

## ハインリッヒ・ブッシュの「東林書院とカトリック教会」

葛谷 登

以下に掲げる拙訳は、Heinrich Busch, "The Tung-in Academy and the Catholic Church" (*Monumenta Serica*, Vol. 14, 1949-1955, pp. 156-163) の翻訳である。訳出にあたっては Sankt Augustin の Monumenta Serica Institut から承諾をいただいたので、"Reprinted by permission of Monumenta Serica Institute" と記す。本稿の全体は訳文、原注（586 などの数字）、訳注（傍注①など）、「ブッシュ神父とモニユメンタ・セリカ」からなる。訳者補注は「」で記した。

## 東林書院とカトリック教会

ハインリッヒ・ブッシュ

葛谷 登 訳

「明末思潮の由来」(*Whence the Philosophic Movement at the Close of the Ming?*) 585という論文の中で、イエズス会士アンリ・ベルナル (Henri Bernard) はイエズス会士ダニエロ・バルトリ (Daniello Bartoli, 一六〇八—一六八五) 著『イエズス会史』(*Istoria della Compagnia di Gesù*) 586の中の東林書院及び東林書院のカトリック教会に対する態度に関する一節に注目した。その文章は、以下のように翻訳される。

数年前に、南京に程近い都市の *Vusnie* 587に道徳的徳目、あるいは民衆の統治に最適にして最有用の方法に関する議論をするために集まっていた文人が、有名な書院を建設した。その長所は非常に明白で、また非常に素晴らしい評判が広まったので、書院は他の都市にも増え広がった。すべての(書院)の会員は、自分たちを同一の団体に属する者と考えた。そして逸材が輩出し学問が盛んな四つの省、すなわち南京、浙江、福建、江西では著名な官僚はほとんど書院の構成員であった。わたしたちの博士たち、レオ(霊名、良)、パウロ(霊名、保祿)、ミカエル(霊名、彌格子) 588はそれらの書院の幾つかを主宰していた。神父たちは、キリスト教の信仰が書院制度から得られる大きな利益のために、書院を肯定的に見ていた。というのも、ほとんどすべてのこれらの書院の会員は、キリスト教の法に大いに共感を示したからである。(神の掟を含めて)キリスト教の法は、書院の会員もまた実践するよう求められる同一の道徳的徳目を公に唱え、かつ教えるのである。しかしながら、

わたしたちは、よりすぐれた働きおよび別のより高貴な教えによって、これらの徳目を実践する。この運動が日ごとに広がるにつれて、これらの書院の一つ〔首善書院〕がついにまた北京の宮廷に建てられた。会合の場所として、すべての点で見事な荘厳で美しい建物を完成させるための潤沢な資金がそこにはあった。そして、この書院を装飾する調度品は（外側）とよく合っていた。すなわち、堀の周囲はすべて縁に黄金の飾りがつき、美しく下塗りされた木製の板が垂れ下がっており、そこにはその時々様々な徳目を称えた文章が、その時代の最高の文人によって、とりわけ他のすべての者が父として、また師してと仰ぐ葉向高によって書かれていた。<sup>1</sup>こののち、バルトリの著書では、「書院の会員」と宦官魏忠賢との衝突に関する記述が続く。

この書院に属する一人の重要な地位にいる高官が、いまや一つには公共の福祉への熱意から、また無知無学な宦官が政府を運営することに対する公の恥辱に駆られて……国王に上疏を提出した。<sup>2</sup>

上疏で展開された批判を否定することができなかつたけれども、自分自身を主犯として譴責しないために批判を公にすることを望まなかつた国王は、沈黙を守った。この沈黙という方法は、「提案された意見が国王の目に留まらず、官僚に忝くも答えるようなことをしないで官僚の面子を潰すときに宮廷でよく取られた」方法であった。<sup>3</sup>

この同じ官僚によって提出された一層厳しい調子の上疏は再び、国王によって無視された。この上疏文の作成に関わった多くの高官は、国王からの回答の拒絶に対して大いに憤った。彼らの多くは辞任を願い出たけれども、国王から認められず、罰せられるだけであった。

この宦官魏忠賢は、書院に対しては恐ろしいほどの憎悪を抱き、書院を文人の集まりとしてではなく、過去の世紀と同様に哲学者たち、すなわち書院の会員自身が中国の支配権を皇帝から奪取し自らの手中に入れようと企むところの叛逆者の集まりとして言及した。宦官魏忠賢に与する官僚たちは、この「書院」に対して激しい攻撃を開始

し、書院に対して幾百もの中傷的な上疏を提出した。

続いて北京中が二つの派閥に分かれた。「南部」の書院に反発して「北部」の書院と名づけられた対抗書院が設立された。双方の書院とも設立場所に基づいて名づけられた。<sup>④</sup>

六名の書院の会員が監獄で虐殺された。より高い地位にある別の会員は公開処刑され、遺体は犬の餌食にされた。その直後に、同様の運命を免れるべく、多数の「書院の会員」が毒を仰いだり、自ら縊れて命を絶った。北京で職を失った官僚に加えて、各省では免職され、場合によっては平民の地位に落とされた官僚が三五〇人ほどいた。幾人かの犠牲者の執り成しのために働いた三人の閣老もまたその職を奪われた。

北京で降格された者の中にパウロ博士（徐光啓）とミカエル博士（楊廷筠）がいたことが言及されるべきである。迫害された書院のこの二人の支持者に対して降格以外のことは想像できなかった。<sup>⑤</sup>

この書院はキリスト教の法の教義によく合致していたので、自らを守るために抛り所とすることの出来る友人がほとんどいなくなった状況では、偶像教徒の大軍が、ある者は印刷物により、またある者は国王に提出される上疏により、わたしたちを背後から押し倒そうとしており、これに徐々に屈する形の下り坂に自分たちが置かれていることを知ったのである。<sup>⑥</sup> 589。

バルトリのテキストは、東林党の歴史に関する幾つかの出来事、例えば無錫の東林書院の設立、著名な官僚による文章の中でも内閣大学士葉向高による記念碑的文章を含めて、北京の首善書院の設立、楊漣による宦官魏忠賢批判の上疏および魏忠賢の東林派に敵対する官僚との連合、楊漣と彼の五人の友人、いわゆる「天啓六君子」の殺害、熊廷弼の処刑（処刑に際して楊漣と彼の友人は反対派の策謀に巻き込まれた）ことなどを正確に記録している。正確さを欠いているのは、すなわち楊漣の上疏に関して、皇帝が沈黙を守ったと想定されていることである。事実は、

皇帝は、魏忠賢の一族である内閣大学士魏廣微に楊漣を厳しく指弾した詔勅を作成させ、楊漣の上疏に答えているのである<sup>590</sup>。バルトリの記述の中で中国側の資料と照合できないものとして、とりわけ「書院の会員」によってなされたと想像される夥しい数の自殺、およびいわゆる「北部書院」の設立などが挙げられる。

東林書院に関して、バルトリは、定期的な会合での道徳と政治の結合という特徴を正確に言及している。しかしながら、バルトリが東林書院を模して設立された切れ目なく増加する書院の連合体として東林党を記していること、および東林党の一員を書院の会員として述べていることは正確性を欠く。東林党の面々がすべて書院において活躍していたわけではない（例えば黄尊素などのように、幾人かは書院を軽視していた<sup>591</sup>）。また、東林党に共感した書院のすべてがその設立を東林書院から迸り出る威勢に負うものではない。事実、そのように東林書院に淵源するものとしてわたくしが知っている書院そのものは、無錫の近隣地域にある書院、すなわち武進、宜興、金壇、常熟にあるものである<sup>592</sup>。北京の首善書院の建設さえ、東林書院の直接的な影響によるものではない。首善書院の性格は、完全に非政治的であるという点で、東林書院の性格と異なっていた<sup>593</sup>。

ここで、わたしたちの主たる関心となる問いは、以下のことである。すなわち、東林党がカトリックの教義に対して好意的な態度を取っていたというバルトリの一般的な陳述は、西洋側と中国側の他の資料に確認できるであろうか。わたくしは、これまでのところカトリック教会あるいは宣教師と東林書院周辺の学者との関係についての資料を、西洋側にも中国側にも全然発見できないでいる。

顧憲成と高攀龍は、確かにいずれもマッテオ・リッチの知人である郭正域や蔡獻臣<sup>594</sup>のような友人を介して宣教師について知っていた。高攀龍のほうは、のちに北京での個人的な観察によって宣教師に関する知識を増やしている。それにもかかわらず、顧憲成の『顧端文公遺書』と高攀龍の『高子遺書』に宣教師への言及は見られない。

楊廷筠が洗礼前に草創期の東林書院に関心を寄せていたことを例外として<sup>595</sup>、カトリックと東林書院との間にいかなる関係もわたくしは見出せない。バルトリによれば李之藻、徐光啓と楊廷筠の活躍の場であった様々な書院、およびこれらの書院と東林書院との関係についての情報はいささかも得られていない。

カトリック教会と東林党との関係に関して、以下のことを言うことは充分許されるであろう。すなわち、宣教師の最良の友人のうちの幾人かは東林党に属していたこと、彼を最も脅かす敵は東林派官僚の敵対者であったこと、こうした、また他の理由によりカトリック官僚は東林派に共感を示したことである。内閣大学士首輔（一六〇八年から一六一四年、ならびに一六二一年から一六二四年<sup>7</sup>）の葉向高は、東林派官僚人の擁護者であったと同時に、宣教師の保護者であった。彼自身は実際は教会の門をくぐらなかつたけれども、カトリックの教義に対してかなり好意的な態度を示した。

他方、一六一六年に南京において、宣教師と彼らの活動に対して容赦ない弾圧を開始した沈淮（一五九二年の進士、一六二三年死去）は東林党の敵であったし、同僚にあたる首輔（一六一四年から一六二〇年<sup>8</sup>）で、東林党の対立者に味方した方從哲を支えた。沈淮は一六二一年から一六二二年まで内閣にあった。彼は内閣において宦官魏忠賢を熱烈に支持し、また徐光啓と李之藻が西洋の大砲と砲手を遼東の不安定な前線に配備しようしたことに反対した<sup>596</sup>。『明史紀事本末』は、一六二二年にいわゆる「紅丸」、「移宮<sup>9</sup>」事件への方從哲の対応ぶりが問題であるとして、方從哲を弾劾した東林派官僚の中に李之藻の名を挙げている<sup>597</sup>。

徐光啓は、東林派官僚の追放の犠牲者の一人であった。悪名高き追従者の智鋌が一六二五年に非難されると、彼は役職を奪われ自宅に引きこもった<sup>598</sup>。李之藻は一六二三年に公職から引退していたので処罰は免れたようである<sup>599</sup>。カトリック教徒の誰も一六二六年の始めに公表された公式の追放者名簿である『東林党人榜<sup>10</sup>』には名を列ねな

かった。ただ李之藻が、後に瞿式耜が私的な東林党の名簿の一つに名を載せられたようである<sup>600</sup>。

葉向高および他の東林派官僚とカトリック官僚および宣教師との間に生じた友好的な関係が東林派仲間の多くが教会に対して、友好的なあるいは少なくとも中立的な態度を取らせるに至ったであろうことは、相当程度有り得ることである。しかし、わたくしは「ほとんどすべての」東林派の面々がカトリックの教義に対して強く魅かれたというバルトリの記述は、樂觀的に過ぎるという印象を抱く。もちろん、(とりわけいわゆる「南京教難」以前には)多くの儒教徒が原初の儒教は大きく見てキリスト教の教義と重なるという点で、リッチと意見の一致を見ていることはよく知られたことである。北京の首善書院の創設者の一人である有名な儒教徒である鄒元標(一五五一年—一六二四年)の返書がこうした見解の典型である。彼はリッチの「兄弟」が「天主学」を中国に広めようとする努力を称え、その教義は「わが国の聖賢の言葉」と異ならず、また両者のわずかの差異は慣習(習尚)の結果に過ぎないと述べる<sup>601</sup>。

しかし、すべての儒教徒が外国から来た儒教の競争相手に対して、それほど親近感を覚えたわけではない。例えば、最も尊敬された東林派官僚の一人であり鄒元標と同じく首善書院の創設者であった馮從吾(一五五六年—一六二七年)は、断固として外国の教義を拒否している。一六二二年から一六二二年の間に書かれた彼の『都門語録』<sup>602</sup>には、次のような一節がある。

ある人が、「リッチの天主の説に対してどのようにお考えですか」と尋ねた。わたくしは、「道の大本が天に由来するものであるというのは、わたしたち儒教徒の教えです。わたしたちが天を主と見なさない」などとはどうして言えましようか。しかしながら、他方でわたしたちは堯と舜の遺産を受け継ぎそれを発展させる(祖述堯舜)ことをしないで、ただ天だけに言及するようなことはしません。何故ならばわたしたちは孔子の跡に



做いたいからです<sup>603</sup>。堯と舜の遺産を受け継ぎそれを発展させること、そのことがまさしく天を敬う方法です。ところが、これらの人々は堯と舜、孔子と孟子を打ち捨てて天主だけを取り上げます。——彼らは天子を押しえて（天子の名において）封建領主に命令を發します。それらの命令はわたしたちの教義においては（曹）操と（王）莽の教えとなります。この世にそのような無法な人々がいるとき、そのような人間は処刑され、彼らの書いた書物は焼かれます。それでも彼らの誤った教えが人々の間に根づくことを恐れます。まして、況やそのような教えを広めることの手助けをすることなどできませんか。「知天」、「事天」、「畏天」と言いますが、（そのような重要な原則を持った）わたしたち儒教徒が、どうして天を主と見なさなかったことがあるでしょう。これらの人々（リッチたち、カトリック教徒は）はただ軽薄にもわたしたちの教えとの違いを追求しているだけなのです。張子<sup>604</sup>は、「わたしたちの道はそれ自身で充分である。他にどのような仕事を探さなければならぬでしょうか」と言っています。わたくしもまた、「わたしたちの道はそれ自身、完全（精）です。他にどのような仕事を探さなくてはならないでしょうか」と言うものです。

馮從吾のような著名な講学の師のこうした態度は、間違いなく共感を可能にしたことであろう。

——それは外国の教義に敵対的な東林党の面々によって崇禎年間に著わされた二編の文章から窺える。その二編は一六三九年に徐昌治<sup>605</sup>によって出版された反カトリック教会関係の論文集、『破邪集』の中に収められている。一編は、一六三二年に福建に僉都御史として赴任した鄒維璉<sup>606</sup>（一六〇七年の進士）によって書かれた激越な調子の文章であり、もう一編は巡海道であった施邦曜（一五八五年—一六四四年）<sup>607</sup>によって書かれた一六三七年付けの布告であり、それは住民が外国の宗教に入らないように警告する文章であった<sup>608</sup>。

バルトリの文章に触発され、ベルナルは上記の彼の論文の中でバルトリの文章の範囲をはるかに超える形での

若干の見解を提出している。ベルナルルの翻訳、というよりはむしろバルトリのテキストの書き換えは、「キリスト教徒の博士たち」が東林書院に關係する他の書院というよりは、むしろあたかも東林書院自身の会合を時折主宰したかのような印象を与える<sup>609</sup>。彼はその文章から、「彼の（すなわち、リッチの）忠実な弟子たちは東林派、すなわち無錫派に重大な影響を及ぼしたということは確実である」<sup>610</sup>と結論づける。そして、「（東林派の）最後の代表者は明国から逃走し、日本に渡って王陽明の思想を普及させたり、あるいはむしろ彼らの余儀なく課せられた閑暇を漢の古代の經典本文への回帰に集中させたのである」<sup>611</sup>とあるように、東林派はのちに「清代」漢学派（考証学）を誕生させたと考ええる。ベルナルルは、東林派は後半の活動において、中国の古典の解釈を注釈よりはむしろじかに經典本文に依拠したリッチに影響された可能性が高いと述べる。彼は「このようにして中国の学者に示された聖書積義学の方法の絶対的に革命的な性格」<sup>612</sup>を取り上げる。科学的方法に関するこのような影響に加えて、彼は思想の分野における他の影響を認める。

明代と清代の孔子学派への西洋思想のある種の浸透は、あり得なかつただろうか。そして製図法や曆法同様に、新漢学思想は中西の協力の賜物であつたかも知れないではないか。このような影響はベルナルルにとつて、「新漢学派のすべて、あるいはほとんどすべての学者——とりわけ東林派に敵対的な学派さえも含めて——が、イエズス会士によつて中国にもたらされた数学という学問体系を通過したこともまた確実である」<sup>613</sup>以上、一層あり得べきことがらであつたようである。

西洋思想の觀念が東林派の思想に広く伝わっていたかどうか、あるいは東林派の思想が「清代の」漢学派の起源に直接的な影響を及ぼしていたかどうか、これまでのところわたくしは実証できないでいる。東林書院とは結びつきのない東林党の面々が西洋の觀念に影響されたかどうか、あるいは彼らが漢学の起源に影響力を行使したかどうか

かという問いは、ここではわたしたちにとって直接の関心事項ではない。しかしながら、わたくしはベルナルが示唆したことがらに関して、次のようなことを感想として述べてみたい。わたくしは古典の經典本文に直接依拠するというリッチの方法が、ベルナルがそう考えていると思われるほど、新奇であり、あるいは漢学の起源にとりわけ重要であったということに確証は持てない。古典を自分の見解に合わせようとして注釈をすべて捨て去った焦竑や管志道614のような過激な人物の著作は言うに及ばず、古典の經典本文そのものに回帰することを常とした陳第（一五四一年—一六一七年）615のような学者の著作も折に触れて読まれ知られている。陳第は朱子の注釈とその学派の権威を拒否した——リッチの方法の本質も注釈の拒否というところにある——けれども、それは決して陳第だけに見られることではなかった。例えば、ここでは思想的に東林派に属する学者として二名だけ挙げるにとどまるが、錢一本と孫愼行などは古典における「性」という語の朱子の解釈616について批判している。宋学の拒否は〔清朝〕漢学の誕生に与つたもろもろの要因の一つでしかなかった。古代により近いという意味で、一層信頼の置ける漢代の注釈の体系的な探索は、同様に極めて重要であった。また顧炎武（一六一三年—一六八二年）、胡渭（一六三三年—一七一四年）、閻若璩（一六三六年—一七〇四年）617やその他の学者、そして彼らより以前においてすら、リッチの同時代人である陳第によって適用された文献学的で歴史的な比較帰納法も、また同様に極めて重要であった。この陳第は『詩経』の韻を再現するために帰納的な方法を用いたのである。

- 585 *Bulletin of the Catholic University of Peking*, No.8, Dec. 1931, 67-73.
- 586 *La Cina, terza parte dell' Asia*. わたくしは一八五九年のナポリ版を使用した。
- 587 Wu-hsi (無錫) .
- 588 李之藻、徐光啓、楊廷筠。
- 589 バルトリ、前掲書、第六卷〔第一八卷あるいは第四冊の誤りであろう〕、六一―七〇頁。
- 590 『明史』「楊漣伝」、卷二四四、七六八〇頁／一段<sup>11)</sup>。
- 591 「ブッシュ」東林書院とその政治的及び思想的意義」『*Monumenta Serica*, Vol.14〕七四頁参照<sup>12)</sup>。
- 592 『*Monumenta Serica*, Vol.14〕四四頁参照<sup>13)</sup>。
- 593 『*Monumenta Serica*, Vol.14〕六二頁参照<sup>14)</sup>。
- 594 郭正域に關しは『*Fonti Ricciane*, No.533 [Vol.2, p.43, n.1]』及び「Egli riempiva precisamente questa carica quando nel febbraio 1599 ando a far visita al Ricci in Nanchino」(「ユウケイ」節がある)、No.620 [Vol.2, p.158]。蔡獻臣(“Zai Hiu-thai”)に關しは、同書No.602ff. [Vol. 2, pp. 136-137, n. 3]。
- 595 『*Monumenta Serica*, Vol. 14〕四三頁、152参照<sup>15)</sup>。
- 596 陳垣「李之藻伝」、『国学月刊』第一卷、第三号、一九二六年。<sup>16)</sup>
- 597 『明史紀事本末』卷六八(「三案」)、第二部<sup>17)</sup>。
- 598 この点において、バルトリは『明史』卷二五一の「徐光啓伝」、七六九九頁／一段(中華書局本『明史』二二冊、

- 六四九三—六四九五頁)の記述(二六二五年)、「魏忠賢党智鋌劾之、落職閒住」(六四九三頁)と正確に符合する。<sup>18)</sup>
- 599 *Fonni Riccime*, Vol.2, p.170, n. [3].<sup>19)</sup>
- 600 李之藻の名前は「盜柄東林影<sup>20)</sup>」の名簿に現れる。『酌中志余』の版(巻上、四四葉表)参照。<sup>21)</sup>
- 601 『(鄒子)願学集』(出版時期に関する記述なし。国立国会図書館蔵、巻三上、四四葉表<sup>22)</sup>)参照。『四庫全書総目提要』巻一七二、三六九二頁〔商務印書館、一九三三年版。数字は商務印書館本の頁数〕によれば、原版は一六一九年以前に出版された。<sup>23)</sup>
- 602 『馮少墟集』(一六七三年の再版)『続集』巻一五、一一葉表裏参照。<sup>23)</sup>
- 603 『中庸』第三〇章第一節; Legge, *Classics I*, 427 [The Chinese Classics with a translation, critical and exegetical notes prolegomena, and copious indexes by James Legge, second edition, revised, Vol.1, Oxford, 1893].<sup>24)</sup>
- 604 恐らく著名な新儒学の学者である張載(一〇二〇年—一〇七七)を指すであろう。<sup>25)</sup>
- 605 *Fonni Riccime*, Vol.2, p.84, n. 6.<sup>26)</sup>
- 606 鄒維璉に関しては、『明史』卷二三五、七六五八頁／四段〔中華書局本第二〇冊、六一三七—六一三九頁〕および『東林列伝』巻二九、五一九葉〔明文書局本(一)、二三一—二三九頁〕を参照。<sup>29)</sup>
- 607 施邦曜に関しては、『明史』卷二六五、七七三八頁／三段〔中華書局本第三冊、六八五一—六八五二頁〕および『東林列伝』巻一〇、一一四葉〔明文書局本(一)、四九三—四九八頁〕参照。<sup>30)</sup>
- 608 陳垣「從教外典籍見明末清初之天主教」(*Bulletin of the National Library of Peiping*, Vol.8, No.2, March-April 1934 [『国立北平図書館刊』第八卷、第二号、一九三四年三・四月、下編、]「十 奉教之熱誠」〔中華書局『陳垣學術論文集』第一集、二二〇—二二二頁<sup>31)</sup>])。陳受頤“The Early Jesuits’ Conception of Confucianism and its Repercussions in China”,

*Kuohsue chi-kan* 『国学季刊』, Vol. 5, No. 2, 1935, pp. 1-64.<sup>(21)</sup>

609 ヘルナールは、バルトリの文章を次のように英訳している。"A few years before, there had been instituted at Wushin a famous academy of scholars who used to meet in order to discuss sometimes moral virtues, at other times the most appropriate and useful means to obtain a good government for the people. All the scholars of any renown in the provinces of Nanking, of Chekiang, of Fukien, and of Kiangsi formed part of this Academy. Our Christian Doctors, Leo ( Li Chih-tsoo [李之藻] ), Paul ( Hsu Kuang-ch'i [徐光啓] ), and Michael ( Yang T'ing-chun [楊廷筠] ) [sic] were its presidents several times". Henri Bernard, "Whence the Philosophic Movement at the Close of the Ming?", p. 68.

610 同ヘルナール論文、七三頁。<sup>(22)</sup>

611 同論文、七三頁。<sup>(24)</sup>

612 同論文、七一頁。<sup>(25)</sup>

613 同論文、七三頁。<sup>(26)</sup>

614 *Monumenta Serica*, Vol. 14, p. 85.<sup>(27)</sup>

615 陳第に関しては、金雲銘『陳第年譜』、福州、福建大学、一九四六年。<sup>(28)</sup> また、前掲谷肇祖『明代思想史』第八章。<sup>(29)</sup>

616 *Monumenta Serica*, Vol. 14, p. 91ff.<sup>(30)</sup>

617 顧炎武、胡渭、閻若璩に関しては、*Eminent Chinese of the Ch'ing Period* [『清代名人伝略』] edited by Arthur W. Hummel, Washington, United States Government Printing Office, Vol. 1, 1943, vol. 2, 194] 参照。<sup>(31)</sup>

訳注

- (1) "Erasi da pochi anni addietro instituita in Vusnie,città presso à Nanchin, una famosa Accademia di Letterati,che si adunavano a ragionare or delle virtù morali,or de'modi più acconci ed utili al buon governo de'popoli: e n'era il pro si manifesto, e la fama che ne correva sì gloriosa,che in breve spazio si multiplicò in altre città: e gli Academici di tutte insieme si avevan per un medesimo corpo: nè quasi vera Mondarino di nome nelle quattro Provincie dove più fioriscono gl'ingegni e gli studj,Nanchin,Cechian,Fochien,Chiansi ( tutte nella parte australe della Cina ), che non vi fosse ascritto. I Dottori nostri,Lione,Paolo,Michele,presedevano in alcune: e i Padri ne commendavano l'istituto,per lo grand' utile che ne traeva la Fede: perochè quasi tutti quegli Accademici si affezionavano in gran maniera alla Legge cristiana, la quale ( oltre alle divine ) professava e insegna quelle medesime virtù morali,che anche essi prendevano a praticare: anzi noi in opere più illustri, è con maniere d'altro più nobile insegnamèto. Così ogni di più dilatandosi, venne a fondarsi una di queste Accademie nella Corte di Pechin; e per lo dove adunarsi, v'ebbe in abbondanza danajo ad alzare tutta di piantatuna fabrica maestosa e bella, luno e l'altro a maraviglia: e conveniente ad essa l'arredo, con che addobarla: cioè, per tutto intorno alle mura, favole di bel fondo, con fregi d'oro al lembo; e dentr, in lode qual d'una e qual d'altra virtù, componimenti di elevatissimo stile, sì come d'uomini in professione de lettere i migliori di quell'età, è singolarmente del Colao Iè, cui tutti gli altri rispettavano come padre e maestro ". ( Brescia, Libro4, pp. 66-67. 1838 ).
- 葉向高は、首善書院に関して「新建首善書院記」という文章を記している（内閣文庫所蔵『蒼霞余草』巻二「一葉表一三葉裏」）。
- (2) "Or di questa Accademia v'ebbe un gravissimo Mandarino, che tocco parte dal zelo del ben comune, parte della vergogna d'un sì publico vitupero, con'era, che un ignorante Eunuco avesse egli solo in capo la machina che non vi capiva, ..... presento al Re un memoriale,...." ( idem, p. 68 ).
- (3) "vi consueta usarsi, quando le proposte non piacciono; e in tal modo, punir nell'onore il Mandarino, non degando rispondergli." ( idem, p. 68 ).
- (4) "Con ciò tutta Pechin fu divisa in due parti, e vi si trizzo una Contraccademia, intitolata del Sententione, all' aposto dell'altra ch'era del Mezzodi, per cagion delle parti dove si erano istituite." ( idem, p. 72 ).
- (5) "Tra' degradati in Pechin, son da ricordarsi i Dottori Paolo e Michele; nè altro era da sperarsi di due mantentori della perseguitata Accademia." ( idem, p. 73 ).
- (6) "Noi, per la stessa cagione dell'Accademia si favoreale alla dottrina della Legge cristiana, fummo in su lo stracuolo all'Ingiù; è con dietro à sospingerci una calca di nemici Idolatri, chi con libri in stampa, chi con memoriali al Re; e con sì pochi amici al cui patrocinio ricorrere per difesa, ....." ( idem, p. 74 ).
- (7) 『明史』卷一〇〇の「宰輔年表二」にみれば、葉向高が首輔であったのは、一六一三年から一六一四年、ならびに一六一一年から一六二四である（中華書局本、第一一冊、三三三）。

七五、三三七七、三三七九頁)。

(8) 『明史』卷一一〇の「宰輔年表二」によれば、方從哲が首輔であったのは一六一五年から一六二〇年である(中華書局本、第一冊、三三七六頁)。

(9) 「梃撃」を含めてこれらを「三案」という。「紅丸」とは、「一六」二〇年……泰昌帝の即位後、……李可灼のすすめた紅丸をのんで急死した。そこで東林派の楊漣・左光斗や高攀竜らが、……李らを弾劾した」事件であり、「移宮」とは「楊漣らは皇長子を奪回して慈慶宮に移し、……皇長子を即位させた」事件である。要するに、これらは「魏忠賢らの内官派による政權の掌握に対し、東林派がこれを阻止しようとしたもの」であった(東京創元社『新編東洋史辞典』、三四二頁)。

(10) 小野和子『明季党社考』(同朋社、一九九六年)「東林党関係者一覧」によれば、「東林党人榜」とは、一六二五年一月、閹党の盧承欽の上奏によって、処分の対象となるべき東林党三〇九人の姓名を公布したもの(二五頁)である。

(11) 一七三九年武英殿刊本の復刻本である開明書店発行(一九三四年の序)の『二十五史』の頁数と段数を示す。以下同じ。中華書局本『明史』第二冊、六三一九—六三二二頁が対応する。その中には「其党王体乾及客氏力為保持、遂令魏広微調旨切責漣」(六三二八頁)とある。ブツシユの述べるように、天啓帝が楊漣の上疏に答えたのではなく、魏忠賢一派が魏広微に偽りの勅諭を書かせて楊漣を責めたのが真相に近いであろう。

(12) *Moments Series*, Vol. 14, 七四頁、「東林書院と實際に関係したこれらの幾人かの学者(顧憲成、高攀龍、錢一本、孫慎行、顧允成、史孟麟、劉永澄、薛敷教、葉茂才、許世卿、

耿橘、劉元珍、吳桂森、吳鐘巒、華允誠、陳龍正等)に加え、黄宗羲は彼の父であり、東林党の著名な一員である黄尊素(一五八五—一六二六)の名前を加えた。しかし、黄尊素が東林書院に出かけることがなかったことは明らかであり、また概して講学をほとんど評価していなかった<sup>306</sup>。それにもかかわらず黄尊素は高攀龍と劉宗周という時代の傑出した儒教徒の二人と良い関係にあり、社会に対する責任を重視する彼の道徳観は<sup>307</sup>、顧憲成とその友人の道徳観に近いものがあつた<sup>308</sup>。

同頁脚注部分

<sup>306</sup> 黄宗羲は自分の父親が講学にも一度も参加しなかったこと、および彼が北京に首善書院を建設した年長の友人鄒元標に対して、首善書院での講学は善人と悪人の入れ乱れた集まりであり、講学が良い統治に資するものであるかは疑わしいことを語った(『明儒学案』巻六二、東林学案四、一九三九年商務書館本第五版、第二二冊、一八一—一九頁)。(中華書局本下、一四八九頁)。「明史」巻二四五、七九八四頁/二段(中華書局本第二二冊、六三六—三頁)によれば、黄尊素は「首都是哲学研究のための土地ではない(都門非講学地)」と述べ、内閣大学士徐階が一五五三年から一五五四年の間に北京で講学を推進したことにより、激しい批判が触発されたことを指摘し、鄒元標に講学をやめるように勧めたが、失敗した。

<sup>307</sup> 『明儒学案』巻六一、第二二冊、一九頁(中華書局本下、一四八九—一四九〇頁)。

<sup>308</sup> 黄尊素は周順昌とその受難の仲間と獄死する前に講学の時を持った(『東林列伝』巻四、一四葉表(明文書局本(二))。



(13) *Monumenta Serica*, Vol. 14, 四三—四五頁、「東林書院での集まりに定期的に出席し、言わば「内輪」(inner circles)を形成した最も重要な人物は無錫と近隣の地区出身で、その多くは罷免された役人で構成される「正義派」(righteous circles)の面々であった。それらの重要な人物のうちとりわけ目だった者は、東林書院の建設に貢献した者に加えて、武進出身の薛敷教(一六一三年卒、五九歳)、孫慎行(一五六—一六三六年)、宜興出身の張納陞(一六〇九年卒)、金壇の数ある名門の一つの出である于孔兼(一六一三年卒)であった<sup>156</sup>。無錫に東林書院が建設された直後の数年間に、それにならって近隣地区に幾つかの書院が設立されたのは、もっぱら「内輪」の会員の主導や彼らの積極的な協力によるものであった<sup>157</sup>。武進では、錢一本が知県の歐陽東鳳に助けられながら先賢祠と結ばれている経正堂を建てた<sup>158</sup>。宜興では、史孟麟が私財を用いて明道書院を建てた<sup>159</sup>。金壇では、志矩堂が建てられた<sup>160</sup>。常熟では、一六〇六年に顧憲成のもとで学んだ觀察御史耿橋<sup>161</sup>が虞山書院を復興した(内閣文庫所蔵「顧端公文集」巻一〇「虞山書院記」には、建設協力者として東林書院同様、周孔教、楊廷筠、蔡獻臣の三者が名を列ねている(九葉裏、一〇葉表)<sup>162</sup>。東林書院は、これらの書院の導き手と見なされた。東林書院の会員は、書院での会合に集うのを常としたし、東林書院の指導者である顧憲成はしばしば書院の大会に招待され、大会を主宰し講義を行なった。これらの講義は大抵書き留められ、顧憲成によって校正され、商語として出版された<sup>163</sup>。

同頁脚注部分

156 「ブッシュ」東林書院とその政治的及び思想的意義」の

附録「一」東林派士人と支持者の略歴(Biographical Notes)

on Members and Friends of the Tung-shin Circle) 一三四—一五六頁)に収められたこれらの人物の生涯の概略について記された箇所参照(薛敷教は一三九—一四〇頁、孫慎行は一四九—一五一頁、張納陞は一三四—一三五頁、于孔兼は一五四—一五五頁)。

157 新設された書院が「明儒学案」巻五八、第一一冊、五〇頁(中華書局本下、一三七七頁「端文顧涇陽先生」)の顧憲成の生涯に関する記述の中で列挙されている。

158 『明儒学案』巻五九、第一一冊、九五頁(中華書局本下、一四三五頁「御史錢啓新先生一本」)によれば、錢一本が書院を建てたことになっている。「東林列伝」の中の「錢一本伝」(巻二、一七葉表(明文書局本(二)、三四七頁))によれば、歐陽東鳳が建てたことになっている。「東林列伝」の記述は一八七九年(湯成烈等纂修)の『武進陽湖志』(巻一八、五三葉表)の版でもある。これによれば、書院は以前に建てられた龍城書院の跡地に建てられており、経正堂の他に伝是堂もそこには含まれていた。

159 『東林列伝』巻二二、一〇葉表(明文書局本(二)、三八七頁)。

160 『東林列伝』巻二二、三葉表(明文書局本(二)、三一九頁)によれば、志矩堂は于孔兼によって設立された。

161 『顧端公文年譜』巻三、一二葉表(東洋文庫所蔵顧允成「顧端公文遺書」では「顧端公文年譜」巻四となっている。「三十四年丙午五十七歳……三月……嘗熟令耿橋來問学。公以耿為鄰邑父母、却其贄。有所請教、則剖示切直、儼然以師道自居」(一二葉表)。「万曆三四年、顧憲成五七歳。……三月、……常熟知県の耿橋が顧憲成公を訪れ、教えを請うた。しかし憲成公は耿橋を隣りの父母として敬い、弟

子としての謝礼を退けた。ただ尋ねられるとすばりと答え、あたかも師として接した」とあり、一六〇六年に常熟の知県耿橋が顧憲成を訪れ彼に学問上の質問をした。この文をもって耿橋が顧憲成のもとで学んだというブツシユの記述は、些か言い過ぎの嫌いがある。この頃から耿橋は顧憲成との学問上の交わりを開始し、翌年の虞山書院の設立後、耿橋は顧憲成を講学の師として招くようになったのであろう。顧憲成の「虞山商語」はその成果ということではないであらうか。

162 『明儒学案』巻六〇、第二二冊、二二葉（耿庭懷先生稿、中華書局本下冊、一四八二頁）。『明儒学案』巻五八、第一一冊、五〇葉（顧憲成、中華書局本下冊、一三七七頁）には、書院の名前は文学書院として出ている。一六八七年、錢陸燦等纂集の『常熟原志』巻四、二三葉表によれば、耿橋は従来の書院を再建し、それに虞山書院という新しい名を付した。弦歌楼と呼ばれるその孔子廟には、聖人とその仲間の見事な石造りの像が収められている。さらに内閣文庫所蔵『顧端文公集』巻一〇によれば、虞山書院の設立には周孔教、楊廷筠、蔡獻臣もあづかっている（九葉裏、一〇葉表、一二葉裏——三葉裏）。

163 このようにして成立した虞山商語は三つの部分からなり、一六〇六年の二回の大会と一六〇八年の大会での講義内容を、経正堂商語は二つの部分からなり、一六〇八年と一六〇九年の大会での講義内容をそれぞれ記す。また明道商語は一六一〇年の、志矩商語は一六一一年の大会での講義内容をそれぞれ記す。これらに加えて、幾年にもわたった東林商語、一六〇八年からの嘉興（浙江の嘉興ではなく江西の吉水ではないか）にある仁文書院での議論である仁文商

語、同年の南岳書院での大会における議論である南岳商語等がある。明道商語を例外として、商語はすべて『顧端文公遺書』に収められている（『東洋文庫所蔵の顧允成「顧端文公遺書」明（崇禎）刊の第一冊に、「虞山商語」三巻、「仁文商語」一巻、「経正堂商語」一巻、「志矩堂商語」一巻が収められている）。

(14) Monumenta Serica, Vol. 14, 六一—六二頁、「東林書院に於いて、それより知名度の低い新儒学の書院は、この年月の間に東林党の強みであり、東林政治の拠点であったと容易に推測できよう。これらの書院がその性格上、東林書院運動の目的に共鳴していただけではなく、新儒学的な学問研究に傾倒していた多くの役人は実際のところ、東林党の一員であったり、支持者であったところの鄒元標<sup>238</sup>、馮從吾（一五五六—一六二六）<sup>239</sup>と高攀龍は当時最も傑出した新儒学の思想家に属した。鄒元標と馮從吾は、首都においてさえ「講学」の方式を導入し、この目的のために壮麗な首善書院を建てたのである<sup>240</sup>。政治は厳しくその講学の集まりから排除されたけれども<sup>241</sup>、集まりに出席した役人集団は大体東林党に与する者によって成り立っていた」。

同頁脚注部分

237 例えば、曹于忬（一五五八—一六三四）（巻五四、諸儒学案）と彼の友人の馮應京（一五五五—一六〇六）（巻二四、江右王門学案）、支持者孟化鯉（一五四五—一五九七）（巻二九、北方王門学案）と孟秋（一五二五—一五八九）（巻二九、北方王門学案）、呂維祺（一五八七—一六四一）（巻五四、諸儒学案）、鹿善繼（一五七五—一六三六）（巻五四、諸儒学案）、孫奇逢（一五八五—一六七五）（巻五七、諸儒

学案)。これらの人物は、いずれも黄宗羲の『明儒学案』に取り上げられている。これに反して、東林派の反対派は誰一人『明儒学案』に記載されていないのは、多分一つの主張を物語るものであろう。

238 『明史』卷二四三の伝記〔中華書局本第二冊、六三〇—一六三〇六頁〕、『明儒学案』卷二三の伝記〔中華書局本上冊「江右王門学派」八、五三三—五三六頁〕。

239 『明史』卷二四三の伝記〔中華書局本第二冊、六三二—五—六三二七頁〕、『明儒学案』卷四一の伝記〔中華書局本下冊、九八四—九八五頁〕。

240 首善書院に関する短い記述がイエズス会士バルトリ（一六〇八—一六八五）の『中国史』（ナポリ、一八五九年、第四冊、第一部、六二頁〔訳注（上参照）〕）に収められている。

241 『馮少虚集』第一六冊、「都門語録」五〇葉表裏（内閣文庫所蔵『馮少虚統集』卷三、五〇葉表裏）。

(15) *Monumenta Serica*, Vol. 14, 四二—四三頁、「新たに設立された東林書院は、地域と省のレベルの権威から好意をもって見られた。巡撫周孔教自身、多くの役人を引き連れて足しげく大会に出席している。彼は顧憲成と高攀龍と交友関係にあった。彼は頻繁に顧と高と相談の時を持ち、「上疏」の草案を彼らに書き送った<sup>152</sup>。

四二—四三頁部分脚注

152 周孔教の伝記は『東林書院志』（卷九、四二葉〔高世泰「周懷魯先生伝」、刁承祖等撰（一七三三年刊）劉徳麟・朱慧編集「東林書院志 上」（中華書局、二〇〇四年、三八〇—三八二頁）参照〔小野和子『明季党社考』（一四三頁）は、他に『東林列伝』二二、『神宗実録』二九七（万曆二

四年（一五九六年）五月丁卯、顧憲成「周中丞疏稿序」を挙げる。『東林列伝』には「顧憲成、高攀龍為石交、每事諮詢。以是善政滿江左」〔明文書局本（一）、三五四頁〕とあるように、周孔教は東林派の領袖顧憲成、高攀龍と近かった。また、内閣文庫所蔵「高子遺書」には周孔教宛ての書簡「致周懷魯中丞」が収められており（卷八上、七〇葉表—七一葉裏）、一六〇八年の南畿水害への対策について周孔教への助言が記され、善政を期待されそれに応え得る人物像が浮かび上がる。

『東林書院志』には、周孔教のあとについて、東林書院を訪れた役人の中に福建の同安の出身である觀察蔡獻臣の名が挙げられている〔中華書局本上、三八〇頁〕。彼は林采によって書かれた碑文（『東林書院志』卷一五、一二葉—一三葉〔重建道南祠記〕、中華書局本下、六〇〇—六〇二頁）に、道南祠の建設に貢献した人物の一人「觀察同安蔡公虚台」として登場する〔中華書局本下、六〇二頁〕には、「若督撫中丞獲鹿曹公嗣山、直指御史靈寿馬公起莘、督学御史余姚楊公意白、備兵觀察使余姚鄒公龍望、同安蔡公、虚台太府潜江欧楊公宜諸、各捐俸錢以佐春鑪、費金三百七十有奇」とあるが、この「蔡公、虚台太府」は「蔡公虚台、太府」とすべきであろう。これらの資料はリッチの伝記の中に登場する「Zainthar」の資料（*Fonti Riccine*, Vol. 2, No. 602sq. [pp. 136-137] 耶穌会羅馬檔案館「明清天主教文献」第二二冊、艾儒略「大西西泰利先生行蹟」一一—一二頁）に「蔡と呼ぶ福建出身の役人である」としてものを中国側資料によって確定することはできない」としている。しかし、一九一九年林学増等纂修「同安県志（二）」（成文出版社、九〇九—九一〇頁）卷二八「郷賢録」に

「蔡獻臣……遷礼部主客郎中、四方朝貢一依典礼」とある）、および一八八五年（一八八六年重刊、一七九八年、吳堂等纂集。ブッシュが一八八五年としているのは、重刊の四つの序の最初の二つが一八八五年だからである）の「同安県志」（卷二一、三五葉裏—三六葉表）に登場する蔡獻臣の資料とも符合するので、デリアが Zainitai を蔡獻臣に暫定的に同定した<sup>16</sup>と（*Fonti Ricciane*, Vol. 2, 136 n. 3. デリアは蔡? が黃輝の友人ということ、一五八九年の科挙の同期に蔡杲、蔡獻臣、蔡懋賢の三名を挙げ、同安県の出身の蔡獻臣と蔡懋賢に絞り、蔡獻臣が軍人の家柄であるので蔡獻臣の可能性が高いとした。さらに、一五八六年の科挙に同県出身で軍人の家柄の蔡守愚が合格しているが、兄弟関係にはないであろうとして、「蔡?」を蔡獻臣と推定する。蔡獻臣は一六〇一年の後半にはリッチの良き友人の一人になったとする）は正しいことを物語る。

彼は獻臣という名とともに、蔡虚臺という形でも紹介されている。彼の官僚としての経歴に関して、沈徳符によつて一六〇六年に書かれた『野獲編』（卷四、三七葉）「中華書局本『万曆野獲編』上冊、一二六、一二七頁「蔡虚臺弁疏」）の中に若干記述がある（中華書局本、一二六頁）。沈徳符は、蔡獻臣が郭正域の支持者と首輔の沈一貫の支持者との間で闘わされた、楚王とその親族に関する論争（楚案）において、郭正域の側に立つて出した上疏を引用している（中華書局本一二六—一二七頁。また内閣文庫所蔵『高子遺書』卷八下には高攀龍からの返書「荅蔡虚臺」が収められており（二一葉表裏）、正義派官僚として蔡獻臣が公正の実現に功績があったことが記されていることから、蔡獻臣が東林派に近かったことが窺われる）。

一六一一年に故郷の杭州で洗礼を受け、カトリック教会史では「ミカエル楊博士」として知られる楊廷筠（一五五七—一六二七年、一五九二年の進士）も、また多分東林書院の活動に参加したことであろう。楊廷筠は、科挙の座師孫繼皐に寄付を依頼する形で東林書院の設立に関心を示した。孫繼皐は、顧憲成の門人で、一五七四年に第一位で進士に合格し、吏部の侍郎、銓事にまで昇進した。楊廷筠の孫繼皐への手紙の「上孫伯潭少宰書」は、『東林書院志』（卷一七、三葉表）（中華書局本下、六七—六七二頁）に収められている。楊廷筠の名前は、また東林書院の寄付者の名簿にも登場する（『東林書院志』卷一、四葉表）（中華書局本上、六頁）。楊廷筠は「淇園」という号の形で出ている。楊廷筠は、一六〇六年に近隣の県である蘇州と松江の巡按になったの<sup>17</sup>（cf. *Fonti Ricciane*, Vol. 3, p. 13, n. 3）*Fonti Ricciane*の本文では楊廷筠は「楊学院 Direttore provinciale dell'Educatione」と記され、注の部分に、「Commissario di Sochow e Sungkiang 巡按蘇松 nell'attuale Kiangsu (1606)」と記される。<sup>18</sup>の*Fonti Ricciane*の本文は王應麒による「欽勒大西洋国士葬地居舍碑文」の漢文と伊訳文を併記している）、東林書院の大会に参加していた可能性は高いであろう（『東林書院志』卷九「周懷魯先生伝」）の中に「公偕督学楊公、觀察蔡公過東林、率諸士大夫講「正心修身」之学」（中華書局本上、三八〇頁）と記されているので、楊廷筠が周孔教、蔡獻臣とともに積極的に東林書院の講学活動に参加したのはほぼ確実であろう）。

(16) 『陳垣学術論文集』第一集（中華書局、一九八〇年、七一—七九頁）「浙西李之藻伝」。特に、七五—七六頁。

(17) 三民書局本（下）、七六〇—七六一頁。このうち李之藻を

含め、王紀、汪應蛟、陳大道、李宗延、張經世、陳邦瞻、蕭近高、孫居相、周起元、滿朝薦、熊明遇、黃龍光、高攀龍、劉弘化、霍守典、蔣允儀が小野和子作成「東林党関係者一覽」〔明季等社考〕所収に記されている。

(18) 楊廷筠に關しても、「国権」卷八七「熹宗天啓五年」の二月の条（中華書局本、第六冊、五二九頁）、また陳繼儒の『白石樵真稿』卷八「祭楊淇園侍御」にあるように一六二五前後に故郷に帰還しているようである（この資料については梁家勉編著「徐光啓年譜」上海古籍出版社、一九八一年、一五四頁、および楊振鐸「楊淇園先生年譜」商務院書館、一九三四年、五一頁、に教えられた）。

(19) "Il Lingozzon è della città di Hanceo della provincia di Cechian." (p. 170) という本文に付された一六八頁から一七一頁に至る三番目の注 (n. 3) は、李之藻に關するものである。そのうちブッシュの主張の根拠となる箇所が、「Finalmente nel 1623 si ritiro definitivamente dalla via pubblica, e passo gli ultimi anni della sua vita nello studio e nella pubblicazione di libri di scienza o di apologetica." (p. 170) である。

(20) 小野和子「明季党社考」所収の「東林党関係者一覽」によれば、「盜柄東林夥」とは「東林党の初期、盛期、中期、晩期など、おおまかな時代別に東林党人を列挙したもの」（二六頁）である。

(21) 『酌中志余』卷上「東林盜柄夥」の「東林盛」（四四葉表）には「李之藻工部郎加太僕少卿」とあり、「東林晩」（五五葉表）には「瞿式耜知県」とある。さらに「酌中志余」卷上「東林同士録」の「藩臬郡邑二十六人」（二八葉裏）に瞿式耜の名が出てくる。「東林党関係者一覽」によれば、「東林同士録」とは、東林党リストの一つである「東林点将録」の

備を補うために作成されたといわれ、……官職別に東林党人の姓名を掲げる」（二五頁）ものである。

(22) 内閣文庫所蔵本に關しては、一六一九年の周汝登、一六〇七年の黃鳳翔、一六一〇年の蔡國珍、一六一四年の盧陵劉、一六一九年の龍遇奇、一六一四年の李日宣の順に、複数の時期にわたった「序」が収められている。

(23) 『答西国利瑪竇』（内閣文庫本、卷三、三七葉裏—三八葉表）には、東林派の顧憲成、錢一本やリッチと交渉のあった馮應京への書簡が収められている。原注594の關係する本文では、顧憲成や高攀龍は郭正域や蔡獻臣等の友人を通してリッチを知ったと推定しているが、『願学集』を見るところでは、鄒元標が馮應京を通じてリッチを知り、その後で鄒元標を通じて顧憲成がリッチを知ったということも考えられるであろう。

(24) 『四庫全書總目』卷一七二、集部、別集類二五（中華書局本下冊、一五一—四頁）。

(25) 内閣文庫本、康熙一四年刊『続集』卷二、一一葉表裏「都門稿 語録」、「問、利瑪竇天主之說何如。曰、道之大原出於天。吾儒之學何嘗不以天為主。然又未嘗專言天。而不祖述堯舜。願學孔子也。祖述堯舜。願學孔子、正是尊天也。彼置堯舜孔孟而專言天主、是挾天子以令諸侯。乃吾道中之操券也。世間有此不軌之徒、即誅其人火其書、猶恐滋蔓。況從而羽翼之乎。知天・事天・畏天、吾儒何嘗不以天為主而沾沾求異為也。張子曰、吾道自足、何旁求。余亦曰、吾道自精、何事旁求。ブッシュは、「吾儒何嘗不以天為而沾沾求異也」の「而」の上の動詞「為」の主語を「吾儒」、下の動詞「求」の主語を「利瑪竇」に當てて解釈しているようであるが、「求」の主語も「吾儒」ではないだろうか。「異」の中味は、「置堯舜孔孟

而專言天主、是挾天子以令諸侯」である。わが中国の儒教徒はリッチたちのように堯舜と孔孟のような君子、聖人の伝統を無視した天の祭り方をしないということ強調しているであろうと思われる。

- (26) 「三十章一節・仲尼、祖述堯舜、憲章文武、上律天時、下襲土。Chap. XXX.1. Chung-ni handed down the doctrines of Yao and Shun, as if they had been his ancestors, and elegantly displayed the regulations of Wan and Wü, taking them as his model. Above, he harmonized with the times of heaven, and below, he was conformed to the water and land。」中華書局本『四書章句集注』(三七頁)「中庸章句」第三十章一節の箇所の最初に、「仲尼、祖述堯舜、憲章文武、上律天時、下襲水土」とある。『集注』は「祖述者、遠宗其道」とする。金谷治は、「君子として学んで聖人となられた」仲尼は、「聖天子の」堯・舜の道を根源としてうけつぎ」(岩波文庫 金谷治訳注『大学・中庸』一三三頁)と訳す。ブッシュは「未嘗專言天而不祖述堯舜願学孔子也」(訳注25)の引用文中の圈点の部分の「願学孔子」を「祖述堯舜」と分けて、原因理由の句として「何故ならばわたしたちは孔子の跡に倣いたいからです」と訳している。これは無理があるのではないだろうか。「祖述堯舜」と「願学孔子」は並列であり、この文は「わが儒学では天だけを取り上げるだけで、堯舜の跡を語らないこともなく、孔子に倣うことを願わないこともない」というような意味ではないであろうか。
- (27) 張載の代表的著作『正蒙』や『横渠易説』、『経学理窟』、『張子語録』等の収められた中華書局『張載集』(一九七八年)の中には「吾道自足、何事旁求」(訳注25傍線部)という語句は見当たらなかった。

- (28) 本文は、「per esser in luogo alto, dove non arriva l'acqua nelle inondazioni che sogliono essere in quella città, presso del palazzo del Re e tra gente nobile e principale, con stante e sale molto nove e belle et sufficienti per stare otto o dieci Padri, senza fargli altro beneficio」である。n. 671 "Dalla Collezione degli errori putridi 『破邪集』 di Si I'CIAMCE [HSÜ CH'ANG—CHIH]徐昌治, edita nel 1639, veniamo a sapere il luogo esatto di questa residenza di Nanchino....." (徐昌治によつて一六三九年に編集された『破邪集』によつて、われわれは南京の住院の正確な場所を知る)となつている。徐昌治編『聖朝破邪集』に収められた沈淮の一六一年八月の「再參遠夷疏」(巻一、一一葉裏、一一葉表裏)には、「而豊肅神姦、公然潛住正陽門裏、洪武岡之西。……城内住房既拋洪武岡王地、而城外又有花園壺所、正在孝陵衛之前」(近世漢籍叢刊一四、柴田篤解題 中文出版社、一一〇九四、一一〇九五—一一〇九六頁)とあるように、南京教会の位置を示す記述があるので、Fonti Riccioneのこの箇所で便宜的に『聖朝破邪集』が言及されているにすぎない。この注では『聖朝破邪集』本来の性格を問題にして取り上げているのではない。ところで柴田篤の「解題」によれば、「徐昌治は始め鹽官であつたが、崇禎元年(一六二八)金粟寺の密雲圓悟に参じ、その法嗣石串通禪の鉗錘を受け、同十一年圓悟の嗣費隱通容に從つて天童山に居住し、順治十三年(一六五六)春、虞山維摩堂にて通容より付法を受け、無依道人と号した。……この『聖朝破邪集』は、徐昌治が既に破邪論を著していた圓悟の意を受け、師通容の命によつて編集したものである」(『聖朝破邪集』解題、一一頁)。ここに徐昌治と『聖朝破邪集』の關係が簡明適切に記されている。

(29) 『東林列伝』巻一九には、鄒維璉が楊漣の側に立つて魏忠賢と勇敢に闘った様子が『明史』巻二三五よりも詳しく記されている。また、『明史』(中華書局本、第二〇冊、六一三八頁)は、福建巡撫であったとき、オランダの中国での通商と侵略行為の現実に直面し、鄭芝龍の協力を得てこれと戦ったことが記されている。実際、福建地方がオランダの侵入に悩まされていたことはこの時期の明王朝にとって周知の難題であったようである(『明史』巻二六〇「熊文燦伝」、中華書局本、第二二冊、六七三四頁)。東林派の大物官僚の葉尚高も「中丞二太南公平紅夷碑」(内閣文庫所蔵「蒼霞余草」巻一、一葉表)で、オランダの万曆末年以降の福建進出を問題にしている。果たしてオランダは、一六〇二年に東インド会社を設立してアジア侵入を本格的に開始し、「タイオワン(台湾)」にも一六二四年進出し、……ここを対中貿易の拠点とした(佐藤弘幸「第二部 オランダ」第二章「オランダの海外進出と共和国の凋落」、森田安一編「スイス・ベネルクス史」、山川出版社、二八二頁)のであった。鄒維璉は、対内的には反宦官の立場を貫き、対外的にはオランダ勢力の侵入に抗した。それが東林派としての特徴であったのではないであろうか。

(30) 施邦曜もまた宦官魏忠賢に敵対的な立場を持った様子で、『東林列伝』巻一〇において『明史』巻二六五よりも詳しく記されている。その後彼は明朝最後の皇帝崇禎帝にも忠節を尽くした。なお『明史』巻二六五(中華書局本、第二二冊、六八五一頁)にもあるように、施邦曜は鄒維璉と連携して海上防衛に努めた。施邦曜は、宦官魏忠賢に敵対的な態度を取ったこと、および海上防衛に熱心であったことにおいて鄒維璉と政治的な姿勢を同じくしていたと言えよう。

(31) ここでは、福建の生員層に天主教が広まっていることを述べる『聖朝破邪集』巻二に収められた施邦曜の「福建巡海道告示」(三一葉表―三四葉表、近世漢籍叢刊一四、一一二〇三一―一二〇七頁)に、要約された形で紹介されている。

(32) 陳受頤「明末清初耶穌会士の儒教観及其反応」、『国学季刊』第五卷、第二期、一―六四頁。陳受頤論文は、(一)「緒論」、(二)「耶穌会士の儒教観」、(三)「中国的士夫の反応、同意的方面」、(四)「中国的士夫の反応：反対的方面」の四つの部分から構成される。そのうち、(四)では、孫宏、晏文輝、王啓元、蔣德璟、黃貞、鄒維璉、黎遂球、黃宗義、楊光先、張潮という反天主教の立場を取る一〇名の見解について記されている。六番めの鄒維璉(五六―五七頁)の場合は、『聖朝破邪集』巻六に収められた鄒維璉の「關邪管見録」の二箇所の部分(八葉表裏、九葉表。近世漢籍叢刊一四、一一四五―一一四五六、一一四五七頁)が紹介される。引用された部分は、陳受頤によれば、「破邪集」に一般的に見られる論旨である。さらに陳受頤は、「關邪管見録」には他に中国社会の祭祀活動への参加を禁止したスペインのドミニコ会士を批判する箇所もあるが、論文の対象をイエズス会士に限定しているため、その箇所については詳しく扱わないとする(五七頁)。しかし「關邪管見録」にはドミニコ会士への批判と特定され得る記述はない。

ドミニコ会士への批判と見られる記述は、『聖朝破邪集』巻二所収の施邦曜の「福建巡海道告示」に認められる。この告示は「欽差巡視海道兼理刃儲福建布政使司左布政使兼按察司副使施為拿獲通夷事」(『聖朝破邪集』巻二、三〇葉表。近世漢籍叢刊一四、一一一九頁)とあるように、一六三七年の秋に外国人に内通したという嫌疑で西洋人宣教師と中国人

天主教徒が逮捕された事件を報告した文章である。これには、「該本道查是呂宋夷利瑪竇一派、專講天主者」(三一葉裏。近世漢籍叢刊一四、一一二〇二頁)とあるように、逮捕された宣教師はルソン渡来の、すなわちスペインの布教保護下にある修道会に属していたことが分かる。彼らはイエズス会士ではなかった。矢沢利彦『中国とキリスト教』(近藤出版社、一九七二年、七〇―七二頁)によれば、施邦曜が対峙した相手は、伝統的な中国の習俗に非妥協的なドミニコ会士であった。「告示」に「独有天主為至尊、親死不事哭泣之哀、親墓不修追遠之節、此正孟子所謂無父無君人道而禽獸者也」(一二葉表、近世漢籍叢刊一四、一一二〇三頁)、あるいは「且極詆中國親死追薦之非、既從天主便生天堂、春秋祭祀俱屬非礼。是則借夷教以亂聖道、真為名教罪人」(さらには中国の伝統的な親を葬る儀式や祖先祭祀の欠点を酷評するにとどまらず、天主を信じ従う以上、天国に生れるのだから、春と秋の伝統的な祭祀を儀礼として一切認めない。これは野蛮な外国の教えによって聖なる中国の道を破壊するものであり、まざれもなく名教の罪人である。)(三二葉裏、近世漢籍叢刊一四、一一二〇四頁)とあるように、実際逮捕された天主教徒は祖先祭祀をせず、儒教の季節の儀礼も否定したようである。さらに逮捕された天主教徒に生員があったのも、読書人重視の伝道方針のイエズス会とは対照的であった。生員は明王朝体制の支配の基層にあって儒教イデオロギーを支持することが求められる存在であったから、彼らが儒教の伝統的な祭祀を拒否するとなれば、支配の基層にひび割れが入ることになる。

福建の生員の間には天主教に入教する者が増えるにつれて、他方天主教の伝播に危機感を覚え、これに連帯して反対する

者も生員の間に見られた。施邦曜によって宣教師ならびに天主教徒の生員が逮捕された翌年の一六三八年の秋には、福州の左右中三衛千百戸の効用兵を司る役人李維垣等、生員陳圻等が翰林院左春坊蔣德璟に宛てて「攘夷報國公揭」(巻六、一〇葉表―一葉裏、近世漢籍叢刊、一一四五九―一四六二頁)を提出している。彼らは、天主教徒が外国の侵略勢力に内応する恐れがあるとみて、宣教師の追放を中央政府に訴えたのである。福建においてイエズス会とドミニコ会によって伝えられた天主教は、伝統的な儒教の支配の基層からすれば侮りがたいほどに増え広がっていた。

この事件は思わぬところまで波及した。フィステル(Aloys Fisetel)の『入華耶穌会士列伝』(馮承鈞訳、台湾商務印書館、一五五頁)には、第三九「艾儒略伝」に「一六三八年に突然迫害が起き、諸神父は追放された」と記している。施邦曜の「福建巡海道告示」を受けて出された徐世蔭による「提刑按察司告示」には、「除將天主教首、楊瑪諾艾儒畧等、驅逐出境、外合行出示禁論」(巻二、三六葉裏、近世漢籍叢刊、一一二二頁)とあるように、福建で伝道していたディアスとアレニは追放処分指示されたのである。アレニは、一六二五年に福州に入り、福建の実力者葉向高に援助されながら教勢を拡大して行った(フィステル、一五四頁)。矢沢利彦「イエズス会士の来華とカトリック布教の展開」(榎一雄編『西歐文明と東アジア』平凡社、一九七一年、一八五頁)によれば「読書人から『西来孔(子)』すなわち西方の孔子とよばれたこの人は、すぐに土地の官吏たちの信任を獲得した。澎湖諸島を占領して事実上海賊として行動していたオランダ人に対する民衆の憎しみの念が同じヨーロッパ人である彼をいろいろ困らせたけれども、彼は結局福州府に根をは



ることができた。彼は、一六二五年には毎年八百人から九百人の信者に洗礼を施していると報告できるまでになった」とあるように、土地の行政担当者からの信頼を勝ち取って地道に伝道したのであった。

これに対してドミニコ会は、アレニ等、イエズス会の後に福建に入って伝道した。彼らにはアレニのように大物官僚の助力はなかったと思われる。伝道方針は両者は対立関係にあったけれども、中国の官憲にとっては両者とも天主教である以上、修道会の差異を認識することは困難であったであろう。中国の習俗に対して非妥協的なドミニコ会の伝道の発展とともに、適応方針を取るイエズス会までも伝道が禁止されるに至ったのである。矢沢利彦によれば、「一六三九年（一六三八年？）にはマニラからやって来た新たな宣教師たちが、またもや同じ布教方法をとったので、今度も迫害が発生した。役人たちのきびしい布告がはり出され、教会は没収され、信者たちは迫害を受けた。アレニとディアス自身も一時姿をかくさなくてはならなかった」（前掲書、一八五頁）とあるように、これは清代の典礼問題の前哨戦のような性格を持った重要な事件であったと言えよう。

結局、施邦曜は、「該地方尚有私習此教者、左道惑衆之罪、悉掃其身、一年無犯、許令自新。該道即於通行保甲中嚴飭此款、講說鄉約、候另文頒布繳、蒙此合行嚴禁、為此示仰地方軍民人等知悉。凡有天主教夷人在於地方倡教煽惑者、即速率首驅逐出境、不許潛留。如保甲內有土民私習其教者、令其悔改自新。如再不悛、定處以左道惑衆之律。十家連坐并究、決不輕貸。須至示者」（卷二、三四葉裏―三五葉表、近世漢籍叢刊、一一二〇八―一一二〇九頁）とあるように、『明律』卷一一「礼律 一」「祭祀」一八一「禁止師巫邪術」の「一

応左道乱正之術、或隱藏凶像、燒香集衆、夜聚曉散、伴修善事、扇惑人民、為首者絞、為從者、各杖一百、流三千里」（懷效鋒点校『大明律』遼瀋書社出版、一九九〇年、八七頁）、およびこの律に関する「万曆問刑條例」の二款の二番目、「凡左道惑衆之人、或燒香集徒、夜聚曉散、為從者、及稱為善友、求討布施、至十人以上、并軍民人等、不問來歷窩藏接引、或寺觀住持、容留披剃冠帶、探聽境內事情、及被誘軍民、捨身應禁錮器等項、事發、屬軍衛者、俱發邊衛充軍、屬有司者、發口外為民」（黃彰健編著『明代律例彙編（下）』中央研究院歷史語言研究所、一九七九年、五九一―五九二頁）に基づいて天主教の禁令を福建の住民に通告したのである。

鄒維璉の「闢邪管見録」では、「謬以天主合經書之上帝。夫既明知上帝屢見於六經、郊社所以祀上帝、則至尊在上帝可見矣」（卷六、八葉表裏、近世漢籍叢刊、一一四五―一一四五六頁）とあるように、儒教の經典に出て来る「上帝」という語を「天主」に置き換えることに疑問を呈し、「終托漢時西國之兇夫耶穌、為天主應運設教、是其標大題、潛大旨、不惟呵仏罵老、且凌駕於五帝三王周孔之上、從來大變未有甚於此者」（卷六、八葉裏〔漢籍叢刊、一一四五六頁〕）とあるように、天主は漢の時代の西洋の悪人を意味し、そのような悪人を仏教、道教のみならず儒教の聖人君子の上に置くことは儒教の根幹をなす秩序を破壊するものと捉え、「但云我以天主為父、万民為子而仁孝軀大、世間君父同為兄弟、何足事哉。噫道亦甚」（卷六、八葉裏―九葉表、近世漢籍叢刊、一一四五―一一四五七頁）とあるように、万民を天主のもとに水平、平等に見なす天主教は、親親差等の愛を唱える儒教道徳と真つ向から対立すると認識したのである。これは適應主義を取ったイエズス会と西洋的キリスト教主義を取ったド

シニコ会との双方に対して、皇帝を頂点とする一君万民の秩序を絶対視する儒教の立場からのキリスト教への本質的批判であったと言えるのではないだろうか。

(33) "It is not any less certain that his faithful disciples exercised a great influence on the school of Tung-ling or of Wushi". 下線部はブッシュの引用文では欠落している。この部分は、論文の結論でベルナルが胡適の文を引用したのちに胡適の文意を明確にするために挙げられた三点のうち二番目の点に位置する。

(34) "whose last representatives fleeing from the Mings, passed to Japan where they popularized the thought of Wang Yang-ming (Oyomei), or rather devoted their enforced leisure to a return to the ancient texts of the Hans" (Loc. Cit. p. 73) 下線部はブッシュ引用文にはない。この文は原注60の引用文の直後に接続する文である。ベルナルが胡適の文意を明確にするために挙げた二番目の点の残りの部分である。

(35) "The missionaries, contemporary to or immediately succeeding Ricci, were not mistaken about the absolutely revolutionary character of the method of exegesis thus proposed to the scholars of China". (Loc.cit. p. 71) 下線部がブッシュが引用したベルナルの文章の箇所である。この文はベルナル論文の「The Rebuttal of the Opponents of Ricci」の節の中にある文である。

(36) "3. It is also certain that all, or nearly all, the scholars of the neo-Han school, — even those especially hostile to the school of Tung-ling —, passed through the discipline of the mathematical sciences brought to China by the Jesuits. Since that time a question is persistently raised — that I declare myself incapable of answering at present and on which I ask the advice of those more learned than

myself: Could there not have been a sort of transfusion of Western thought in the Confucianistic schools of the Mings and of the Ts'ings, and, as in the case of cartography or of the calendar, may not the philosophy of the neo-Hans have been the result of a sino-European collaboration?" (Loc. cit. p. 73) ベルナル論文では細線部が先に、太線部が後に来ているが、ブッシュ論文では順序が逆になっている。

(37) *Monumenta Serica*, Vol. 14, 八四一―八五頁、「しかしこれらの仲間〔王学左派、泰州学派〕に対する仏教の影響、及びそれより少ない程度であるが、道教の影響は修養の方法に限定されていなかった。王畿はためらうことなく涅槃や輪廻などのような特殊仏教的な教義を高く掲げた。後に王学の過激派が当時流行していた三教帰一の温床になった。例えば、羅汝芳などは若い時分に仏教と道教の双方を学び、仏教の僧侶と道教の道士と自由に交わった。羅汝芳の見解は少なくとも或る程度までこうした交わりの色に染まった。羅汝芳の弟子の周汝登は儒教と仏教は互いに和合すると確信したので、それゆえ一禪に類する昔の儒学者の語類を(マ)とくく集めて「聖学宗伝」を編集した」〔汝登更欲合儒釈而会通之、輯聖学宗伝、尽探千儒語類禪者以入〕、「明史」卷二八三「羅汝芳伝」、中華書局本、第二十四冊、七二七―七六頁〕。焦竑もまた三教の無矛盾性を支持したが、『四庫全書総目提要』によれば、彼は仏教と道教が儒教に優越するかのようについて、焦竑はまた仏教を批判する程顥の議論を論駁しようとする。儒教の古典を「二教」の文書の力を借りて、またそれらの言葉を駆使して解釈した。もう一人王学左派の典型的な信奉者で三教合一論者であったのが、管志道であった。顧憲成が王学の過激派に対して議論を展開したのは、主に管志道と

の論争においてであった」。

(38) 金雲銘『陳第年譜』は、のちに台湾銀行経済研究室編輯になる台湾銀行発行の台湾文献叢刊の中の第三〇三種として、一九七二年に出ている。全一四八頁である。世宗嘉靖二〇年の一歳から神宗萬曆四五年の七七歳までに至る詳細な年譜である。附録として『連江県志』『儒林伝』を入れる。

(39) 「考証学与反玄学——陳第」(上海書店民国叢書、第二編7、二七〇—二八三頁)。容肇祖が言っているのは、陳第は多くの大きな証拠によって確かだ間違いのない古音を明らかにしただけでなく、その上に唐宋以来の経学や理学を排撃したことである(二八二頁)とあるように、陳第は実証的な方法によって未知主義的な宋代の理学を批判し、清代の考証学の先蹤となったということである。決して注釈に拠らないで本文そのものに当たるということを自らの方法としたわけではない。彼は「字音の歴史的变化の認識、一字一音の原則、学問的命題は事例全体の調査によって証拠づけるべきだ」という方法的態度(木下鉄也『陳第』、日原利国編『中国思想辞典』研文出版社、三二〇頁)を確立したにはかならない。

ところで、ゲッドリッチの『明代名人伝』(Dictionay of Ming Biography 1368-1644, edited by L. Carrington Goodrich, Columbia University Press, 1976)にはChaoying Fang執筆の「陳第」の項目(第一巻、一八〇—一八四頁)がある。そこには、「多分これまで提出されていない議論の余地のある問いがある。陳第はイエズス会士と関係を持ったのだろうか。もし持ったとするならば、彼の音韻学の研究はどのような具合に西洋の学問に影響されたのだろうか。第一に、彼が一五九八年から一六〇〇年の間、広東と江西を旅行したとき、イエズス会の拠点をすべて通過したからには、外国人のことを

認識していなかったということは少なくとも極めて考えにくいことである。第二に、彼は一六〇四年から一六一四年の間、おもに南京に居住していた。南京には、一五九八年にイエズス会士が教会を建設している。第三に、南京での彼の友人で宿の提供者でもある焦竑は、宣教師のマッテオ・リッチが南京を訪れたとき(一五九九—一六〇〇年)にリッチと面識を持った。リッチが、漢字のローマ字表記に関する論文『西字奇跡』を出版したのは一六〇五年であった。しかし、出版に至る相当前の段階でリッチは、自著の内容について中国人の学者に説明しなければならなかったはずである。リッチから説明を受けた中国人学者の一人に焦竑がいた可能性が高い。陳第が広東から帰ってすぐに『毛詩古音考』を書き始めたこと、焦竑がリッチと知り合って間もない頃の一六〇四年から一六〇六年に焦竑の屋敷で同書を書き著したことは、西洋音韻学の書物と陳第の古代音韻学研究に対する方法論との間に何らかの関係があり得ることを示唆するように思われる(一八三頁)とあるように、陳第の音韻学研究の方法が西洋音韻学の影響を受けている可能性が指摘されている。

このようなことが事実として存在しているならば、それは天主教が東林派の枠を超えて中国の思想と交渉を持ったことを示唆するものであろう。実際『Fonti Ricciane』の“Ambedue questi letterati fecero molta accoglienza al Padre.”(Vol. 2, p.68)と記されているように、焦竑と李卓吾はリッチを好意的に迎え、交渉を持っていたようである。しかも焦竑は天主教士人徐光啓の一五九七年の順天府郷試の座師であるから、リッチの南京滞在の時期だけでなく、リッチを始めイエズス会宣教師とはその後も何らかの交渉を持続させたと思われる。したがって『明代名人伝』にあるChaoying Fangの推測は事実に近い

いものがあるように思われる。いずれにせよ、『陳第年譜』を見る限り、『毛詩古音考』の成立過程において——焦竑が同書の序を記していることからしても——一六〇四年から一六〇六年に至る期間、焦竑の占める位置は大きかったことが分かる（台湾文献叢刊本、九二—一〇〇頁）。

他に、日本の歴史学者宮崎市定なども、天主教士人李之藻の仲間に属した許胥臣の『四書人物考訂補』を一例として挙げ、「考証的学風は……新たに接触し始めた西洋の学術からの影響である」（『論語の新研究』「宮崎市定全集」四、岩波書店、五七頁）とあるように、西洋の学問の中国の考証学への影響を認めようとする。許胥臣は、宮崎市定の述べるように、浙江省錢塘県の人で天文学に通じていた。阮元の『疇人伝』卷三三に「伝」が収められている（世界書局『疇人伝彙編』上、四一—八頁）。

(40) *Monumenta Serica*, Vol. 14, 九二—九三頁、「既述のように、東林派の思想家は王学派の自由主義者に対して統一戦線を展開したけれども、朱子学派と王陽明学派という競合する二つの学派に対する態度において分裂した。これは彼らが互いに論争に明け暮れたことを意味しないし、彼らの間に重大な見解の相違があったというふうなことも、多分意味しないであろう。彼らの間に見られる相対立する態度とは、むしろ彼らを取り扱う問題に関する——大まかに言えば——強調の差異を反映しているように見える。総じて朱子学派の側に立つ顧憲成と高攀龍によって取られた立場は以下に若干詳しく取り扱われるであろう。ここでは他の二名の代表的な東林派である錢一本と孫愼行に注目する。彼らは朱子学派と王陽明学が基本概念の「性」に関して持っている異なる見解を議論して、王学派に組したのである<sup>374</sup>。

脚注部分

374

錢穆は『大学叢書』中国近三百年學術史』上海商務院書館、一九三七年、九一—四頁）、東林派の思想家に特徴的な三つの教義として、無善無惡説の拒否、本体への沈潜に抗して工夫の強調、そして朱子学派における義理の性と氣質の性の区別の拒絶（「」はブッシュの英語原文は *the rejection of the Chu Hsi School's distinction between ideal and material nature*）」となっている。しかし錢穆の著書では、「与弁工夫本体大意相近者、尚有氣質之性与義理之性之弁。蓋蔑氣質而空言義理、正与蔑棄工夫而高談本体同病、說雖高而不免於懸虛、若求切實工夫也、捨氣質莫由也」（二三頁）となつている。錢穆は朱子にならい、氣質の性と義理の性を峻別したことを述べている。氣質の性は不完全であるから、ここに工夫を施す必要が生ずるわけである。したがって錢穆は義理の性と氣質の性の区別を採用したのである（う）をあげる。最後の三番目は、錢一本と孫愼行にのみ特徴的なものである（錢穆の著書では、東林派の講学は王学末流の弊害を是正しようとして、期せずして王学から朱子学への回帰の傾向をもたらしたことになっている。その前の部分で、宋学が氣質の性を新たに儒教概念として設けたことを批判する錢一本と孫愼行の文章が引用されている。要するに、一三頁から一四頁までの箇所は、前後の接続が不明な形で錢穆の論旨が展開されている。顧憲成と高攀龍は、この三番目の問題に関して真剣に取り組まなかったように見える（錢穆は高攀龍と顧憲成には言及していないのではないであらうか）。

(41)

顧炎武に関しては、Fang Chao-ying 執筆（『清代名人伝略』第一卷、四二—四三六頁）。「顧炎武の影響のもとに出現し

た学派は、漢代の注釈を尊重したために、後に「漢学派」として知られるようになった。……漢学派は当時の中国の学者が関心を示した歴史的な本文批評、音韻学、語源学の分野で適用された「考拠」或いは「考証」として知られる帰納的な方法を代表するようになった。……古代の音韻の再現のためにこの方法を最初に用いたのが、福建省連江県の人で薊鎮游撃將軍の陳第（字、季立、号、一斎、一六二〇年あるいは一六一七年死去。七七歳）であった。……顧炎武は彼の多方面にわたる音韻研究において陳第の方法を採用した。彼は陳第の方法の応用性を示すためにより多くの例を挙げることによってその方法を広く知らしめたので、清代の学問において陳第の方法は最も有効的な方法の一つとなったのである」（四二二—四二四頁）とある。

胡渭に関してはJ.C. Yang 執筆（『清代名人伝略』第一卷、三三五頁—三三七頁）。「胡渭の時代まで六百年の間、宋の学者の見解が中国の思想界を支配していた。「易」に関しては彼らの解釈が権威として認められた。卦は古代、伝説的皇帝伏羲の時代にすら遡るとされた。胡渭は卦の実際の起源を明らかにし、「易」の本文との相違を示すことによって、宋の新儒教の宇宙論に大打撃を加え、こうして「易」の研究を論拠のしっかりした歴史的基礎の上に位置づけることができた」（三三六頁）とある。

閻若璩に関しては、S.H. Chi 執筆（『清代名人伝略』第二卷、九〇八—九一〇頁）。「宋代において呉棫（字、才老。一一二四年、進士）や朱熹、他の学者は四世紀の文献の信憑性に疑問を投げかけた。そして一五四三年に梅賾（孫星衍）の項参照（『清代名人伝略』第二卷、六七六—六七七頁）は「古文尚書考異」を世に出した。しかし、長きにわたって流布した文献の信憑性は多くの人々の間で疑われることはなかった。閻若璩は二十歳になるまでにその信憑性を疑い始め、のちの三十年間というものをその問題に関する徹底的な調査研究に費やした。その結果が上記の「尚書古文疏証」である。ここでは説得的な証拠と賢明な議論によって千年の間流布していた「古文」が偽書であることが疑いの余地なく証明された。学者の中には閻の結論に異議を唱える者もいたが、「毛奇齡」の項参照（『清代名人伝略』第一卷、五六四頁）、大方の漢学派（「顧炎武」の項参照（『清代名人伝略』第一卷、四二三頁）の徒は疑いをさしはさむ余地を見出さなかった。閻の発見が中国における歴史的批評にとって持っている重要性はどれだけ強調されてもよい。それにより長いこと敬意を集めていた古典が引き摺り下ろされただけでなく、古典の作品——どれほど聖なるものであれ——のすべてを批判的に検証する道が開かれたからである」（同、第二卷）。

## ブッシュ神父とモニユメンタ・セリカ

### 一

後藤基巳著『明清思想とキリスト教』（研文出版、一九七九年）の中に、「明末儒教とカトリック伝道」という東西の思想交渉に関する洞察に富んだ論文が収められている。この論文はもと『白百合短期大学紀要』第三輯（一九五七年二月）に発表されたものである。その中に次のような記述がある。

一般に明末、というより明代中葉以降の儒教思想界の主流をなすものは、いわゆる王学（陽明学）である。：さらにその後学のうち、いわゆる左派王学・新陽明学の名を以てよばれる一群の思想家たちは、師説を極端にまでおしすすめますます観念論的色彩を濃くし、人間の自然本能的欲望を積極的に肯定し、これと対立的な外的規範の束縛を否定する立場から、名教倫理を蔑棄して、終には儒教思想の埒外に逸脱して、これを鋭い対立を示すに至った。これがいわゆる「王学末流の氾濫」という現象で、十六世紀の後半にはその風潮が最も著しい。しかし同時にこのような自由思想の横溢と攻勢に対しては、伝統的儒教思想の陣営においても真剣な自己批判と、それに本づく反攻護教運動がひきおこされる。：これらの事実を通じて、われわれはこの時期における新しい儒教主義的反攻護教運動の生起を知り得るのであるが、特に東林の講学はその風氣の中心をなし、またたく間に江南諸省（江蘇・浙江・江西）の著名なる学士文人を多くこれに響應せしめて蔚然たる勢力を張るに至った。

……

東林学を中心とする儒教革新運動はカトリック伝道に対する肯定受容的関心と容易に結びつき得る。すなわち反儒教的自由思想の横溢と攻勢に対して、新しい護教理論の展開を冀求しつつあったこの派の人々にとって、……カトリックの教説は、奉教士人と同じく、その教うるところが儒教聖賢の本義に悖らず、しかも清新緻密な論理的思弁力を備えた点において肯定受容さるべきものであったといえる（同、一〇〇—一〇二頁）。

後藤基巴は、王学末流によって引き起こされた道徳的アノミー状態に抗して、秩序回復を志向した講学運動としての東林派と王学末流と結合した仏教と道教との思想的決別を宣言する天主教とが親和性を持つものとして、「東林学・東林的風気におけるカトリック伝道の影響を肯定的に推定したい」（同、一〇二頁）とする。そして、後藤基巴は、自分の考えと同じ側に立つイエズス会士アンリ・ベルナルHenri Bernardと反対の見解を持つ神言会士ハインリッヒ・ブッシュHeinrich Buschの見解を紹介する。

近時における明末伝道史およびリッチ史伝の権威ある研究者として精力的な業績を示されたイエズス会のアンリ・ベルナルHenri Bernard師も、そのいくつかの著書・論文の中でバルトリ師のこの記事を有力な根拠として、東林学に対するカトリック伝道の影響に肯定的な推定を下しておられるが、その実証的資料の欠乏については、……嘆じておられる。また、さきごろ東林学についての力作の研究The Tung-lin Shu-yuan and Its Political and Philosophical Significance (Monumenta Serica, Vol. 14)を発表された神言会のハインリッヒ・ブッシュHeinrich Busch師は、その巻末に「東林学院とカトリック教会」という参考論文を附し、ベルナル師の見解およびその本となったバルトリ師の記事を批判しながら、「西洋側・中国側いずれの資料からも、教会または宣教師と東林学派の学者の間の関係を実証すべき証拠を見出すことは不可能である」という否定的見解に

到達されている（同、一〇二—一〇三頁）。

つまり、ベルナルは東林派とカトリック教会との間に親和関係を認めるのであるが、それは実証性の点で不充分であり、ブッシュは豊富な資料を論拠に東林派とカトリック教会との間に相関関係を認めないというのである。これに対してベルナルと同様に両者の間に親和関係を見出す後藤基巳は、反証として宣教師と親しかったと思われる葉向高、鄒元標、馮應京、張問達、左光先等、東林派やそれに近い人々の例を挙げる。後藤基巳のブッシュへの反論は正しいのであろうか。正しいとすれば、東林派とカトリック教会との間に明確な親和関係がなければならぬ。

しかしそれは東林派とは何かということが明確にされなくてはならない。戦後日本の東林派研究の記念碑的業績は、小野和子の「東林派とその政治思想」（『京都東方学報』第二八冊、一九五八年）であり、金字塔的業績は溝口雄三の「いわゆる東林派人士の思想——前近代期における中国思想の展開（上）——」（『東洋文化研究所紀要』第七五冊、一九七八年）であろう。両者も後藤基巳の視点に加えて、社会思想的視点をもつて出身階層に目を留め東林派の思想史の意味を考察しているように見える。

すでに後藤基巳の引用文の中に記されているように、この「東林書院とカトリック教会」という論文は、モニュメンタ・セリカ *Monumenta Serica* 第一四巻に載せたブッシュの「東林書院とその政治的及び思想的意義」（*The Tung-Lin Academy and Its Political and Philosophical Significance*）（一—一三三頁）という大部の論文に附された一つの補助論文——第一が「東林派とその仲間の伝記的注釈」（*Biographical Notes on Members and Friends of the Tung-Lin Circle*）（一三四—一五六頁）、第二が「東林書院とカトリック教会」（一五六—一六三頁）——の一つである。この論文は、あくまで附録（APPENDIX）なのである。ブッシュの言う東林派の実態と本質を知るためには、



主論文を読み込む作業が必要なのである。このブッシュの東林派に関する論文は、小野論文、溝口論文以前に出された偉業であって、開拓者の業績と言えるのではないだろうか。はたしてフランスにおける中国学の権威でコレージュ・ド・フランスの名誉教授ジャック・ジェルネ Jacques Gernet がブッシュ論文を東林派研究の中で「古典的地位を確立した研究」(une étude devenue classique)<sup>1)</sup>と評するとおりである。

一一

まずこの論文が記載された *Monumenta Serica* 第一四巻に着目したい。これは一九四九—一九五五年に当たるものである。単年度のものではない。ということは、一九四九年から一九五四年まで、この雑誌は休刊していたのである。一九四九年とは中華人民共和国が誕生した年である。雑誌の冒頭の編者挨拶 (Editorial Note) は以下のように記す。

中国共産党が北京のカトリック大学 (輔仁大学) を五年前に占拠したとき、大学の中国学の専門雑誌であるところの *Monumenta Serica* もまた停刊を余儀なくされた。

しばらく前、輔仁大学を運営していた神言会は、雑誌の出版を再開することを決定した。この知らせは *Monumenta Serica* のかつての寄稿者と支援者すべてから喜ばれた。

そのとき以来、編集委員会は新しい環境に適應するように組織が再編されたし、編集事務局も不完全ながら設置された。 *Monumenta Serica* はようやくくついに再び極東の地において姿を見せ、その創刊者である神言会のピアラス神父 (Fr. X. Biallas, S.V.D.) を通して一九三五年に託された使命を果たそうとしている。

わたしたちは中国学の豊かな伝統を持つこの新しい国での客分として *Monumenta Serica* が、過去において中国文化の真つ只中に置かれていたことが齎した若干の利点を今後も享受し、それらの利点を今度は寄稿者と読者に供与し続けることを希望するものである。

発行人 (Founder) にはビアラス (Fr. X. Billas) 、編集員 (Editor) にはハインリッヒ・ブッシュ (Heinrich Busch) 、准編集員 (Associate Editors) にはエーター (Mathias Eder) 、ファイフェル (Eugen Fefel) 、ロスター (Hermann Koster) 、クローカー (Eduard Kroker) 、マリンガー (Johannes Maringer) 、シュライバー (Gerhard Schreiber) の六名が名を列ねている。いずれも神言会の会員である。

神言会は「一八七五年九月八日ヤンセンによってスタイルに創設された最初のドイツ宣教寛律修道会」<sup>②</sup>であり、一八八二年に山東省の南部において布教が開始された。同会は異教地布教をその使命とし、言語学、民俗学を宗教および宗教学との関係において研究する傾向を持っていた。<sup>③</sup> 輔仁大学は、一九二七年にベネディクト会によって北京に創設されたが、その後、一九三三年に経営が神言会に委譲された。そして、一九二九年より中国人歴史学者の陳垣が校長を務め、日中戦争以降の困難な時期（一九三七—一九四五年）も活動を発展させた。一九四八年には、文学院、理学院、農学院から成る総合大学の観を呈していた。一九四九年に中国共産党が政権を取り、中華人民共和国が成立してから、神言会による経営が困難となり、一九五〇年に中国共産党政府に接收され、一九五二年に公的に閉鎖された。

輔仁大学では一九二九年以降、『輔仁学誌』 *Fu Jen Sinological Journal* が中国語で年二回、モニュメント・セリカ *Monumenta Serica* (『華裔学志』) が一九三五年以降、英仏独語で発行された。<sup>④</sup> 輔仁大学の接收は、これらの雑誌の発行の中断を決定づけるものであったが、それより前一九四八年の第一三巻をもって雑誌の発行は停止した。<sup>⑤</sup>

しかし、「编者挨拶」にあるように、一九三五年に輔仁大学の中国学の専門誌として発刊された *Monumenta Serica* は、日本の東京の神言会の日華文化研究所 (S.V.D. Research Institute of Oriental Cultures) を事務局として、一九五五年に日本に拠点を移して再刊された。その再刊後、最初の記念すべき巻に、神言会のブッシュが東林派研究の大作を世に問うたのである。カトリック系キリスト教主義学校の白百合女子短期大学教授の後藤基巳もまた、この一四巻に、“Studies in Chinese Philosophy in Postwar Japan” (戦後日本における中国思想研究) という論文を載せている。後藤基巳は、一九三九年五月から一九四〇年まで二カ年にわたり、外務省の第三種補給生として北京に留学している。後藤基巳は北京留学時代、恐らくは中国研究の名門輔仁大学を尋ねたであろうし、あるいは一九三九年一月に北京に到着したブッシュとなにがしかの接点があったのかもしれない。そのような縁由からこの論文を知り得たのである。さらに高田淳によれば、後藤基巳の関心は「異なった文化伝統をもつ中国の知識人がいかにカトリックの信仰を獲得するかという点に在った」ので、知り得たブッシュの論文を自ら進んで手に取り、これに言及するに至ったものと思われる。

以下にブッシュ論文の内容目次を示す。

### 第一章 東林書院とその政治活動

#### 予備的覚書―万曆期以前の東林書院

#### 一、政治的党派の勃興と顧憲成の公的経歴

##### a、「正義派」と内閣

##### b、宮廷における「正義派」の領袖としての顧憲成

#### 二、東林書院の復興とその組織

a、書院の建設

b、書院の建物

c、書院の規則

(一) 総則

(二) 手続き上の規則

d、書院に関連する諸活動―教育、歌唱、犠牲

三、東林派と政治

a、政治的批判と扇動の拠点としての東林派

b、「東林党」の名称の由来

c、東林派及び魏忠賢による東林書院の破壊

小結―東林書院の復興とその後の歴史

第二章 東林派の思想

一、東林派の人物と一般的な特徴

二、東林派の思想の概括

a、東林派と王陽明学派の過激派

(一) 王陽明学派の主観主義と仏教的傾向

(二) 保守派儒教の拠点としての東林派

b、東林派の思想家と新儒学の二大学派

三、顧憲成の思想

- a、一般的な位置と主要な問題
- b、反王学主観主義
- c、反無善無惡思想
- d、顧憲成の基本原則
- e、反当下的道德
- f、顧憲成と王陽明の修養方法
- g、顧憲成と朱熹の修養方法
- h、「主静」と「静坐」
- i、小結

四、高攀龍の思想

- a、一般的な位置
- b、精神修養の方法
- c、敬、主静、「静坐」
- d、悟り
- e、気一元論
- f、小結

本来ならば、この本編を訳出し、ブッシユのいう東林派とは何であるかを了解したうえで、果たして東林派とカトリック教会の間にはさしたる関係が見出せないかどうかを判断すべきであろうが、本編が大部であることからここでは訳出することを諦め、わたくしの関心のあるところの「東林書院とカトリック教会」の部分に限定して訳出を試みた次第である。

### 三二

ブッシユは、本論文を通して、東林派とカトリック教会の間に親和関係のないことを主張しようとした。附録論文というには頗る奥行きのある論文であり、汲み尽せぬ多くのことを示唆してくれている。

ブッシユは、天主教に反発する東林派士人として、馮從吾、鄒維璉、施邦曜を挙げる。馮從吾は正統と異端の区別を重んずる講学運動の旗頭である。彼はイデオロギーの側面から、理論面で天主教を正統の側から拒否するもので、道徳秩序の再興を追求した東林派として首肯できる。しかし、後ろの二者は、福建という中心から離れた周縁の地で、しかも倭寇を始めとして外的勢力の侵入を受けやすい地で、天主教の伝道がイエズス会とドミニコ会の二つの修道会によって大々的に推進される現実を目の当たりにしたのである。儒教文化に適應的な伝道方針を取るイエズス会と、儒教文化との対決姿勢が目立つドミニコ会が伝道したのであるが、中国の知識人から見れば、あくまでイエズス会もドミニコ会も同じ教えの仲間として映る。ドミニコ会の伝道が前進すれば、それは天主教それ自身が儒教に対抗する教えとして自らを明らかにしたことになる。イエズス会とドミニコ会を並列視するのではなく、イエズス会とドミニコ会を潜伏形態と顕在形態の関係で捉えることになる。特にドミニコ会の伝道によって、明

代においてたびたび反秩序の動きを示した支配階層の底部に位置し、支配の位階を支える生員層に信徒が広まったのだから、秩序の維持安定を志向する東林派士人からすれば、驚愕的な出来事である。ある意味では、これは極めて東林派にとって本質的な見方に根ざした反応であって、東林派とカトリック教会の間に、座標軸ではマイナスに位置するものの絶対値では大きな強い関係があるのである。親和関係と対立関係は、陰陽逆転の世界である。高瀬弘一郎『モンズーン文書と日本——十七世紀ポルトガル公文書集——』の第四三書簡の「一六一五年二月二日付けリスボン発、ポルトガル国王のインディア副王書簡」には、ポルトガルの利益の追求からマカオの要塞化が暗暗裡に指示されている<sup>8</sup>。中国の領土に侵入し、自己の国益を追求しようとする外国勢力の存在が、南京教難の一年前に書簡によって証明されるころなのだから、マカオから中国に入る宣教師たちに東林派の士人が警戒することは、ある意味では至極当然なことではないだろうか。

東林派とカトリック教会をめぐる問題は、実は東林派の中に反天主教の士人が存在したことでなく、本来秩序の安定と再興を志向する東林派の中に明王朝体制の礼教秩序を侵し得る天主教を肯定的に受容しようとする士人がいたことであろう。明末当時、天主教は宗教としてのカトリックだけではなく、それと共にもたらされた十六世紀、十七世紀の西洋の自然科学と人文科学をも意味していた。したがって明末の東林派士人が宗教としてのカトリックに共鳴したことは否定できないけれども、それ以上に西洋の自然科学が彼らに与えた意味が大きいのではないであろうか。

ブッシュは、親天主教士人として郭正域、葉向高、鄒元標の例を挙げる。鄒元標に関しては、文集からの引用も示す。しかし、顧憲成や高攀龍など東林派の領袖の文集に宣教師と天主教に関する記述がないことを、東林派とカトリック教会との間に親和関係がなかったことの有力な根拠にしようとする。しかし、当時、多くの中国の知識人

が宣教師と交渉を持っている。現在残されている東林派士人の文集に天主教に関する好意的な記述が余り認められないとしても、それは彼らが宣教師と天主教に対して親和的關係を持つていなかったことにはならない。現に宣教師と深い交渉のあった東林派の高官の葉向高の文集である『蒼霞草』二〇卷、『続草』二二卷、『余草』一四卷の内、天主教關係の文章が収められているのは三番目の『余草』である。「西学十誠初解序」が卷五（二二葉表—二三葉裏）、そして「職方外紀序」も卷五（二四葉表—二五葉表）に入っている。そして、後者の「職方外紀序」は、台湾学生書局本『天学初函』所収の『職方外紀』には入っていないが、閩刻本には入っている。<sup>9)</sup>したがって現在の文集に見られないからといって、それが当時彼らが著した文章の中になかったとは言えない。その後の政治状況の変化等から、本人ではなく後の者の都合からもあったであろう文章を外した可能性が低くないと言える。少なくとも東林派士人の現在残された文章に、天主教に対して親和的な文章が寥寥たるものであることは、東林派士人と天主教やカトリック教会との間に親和的な關係が認められないことの説得的な論拠にはなりにくいのではないであらうか。

ブッシュは、楊廷筠と共に東林書院の復興のときに協力してやまなかつた周孔教を紹介している（四二頁）。周孔教は「自ら出講するなど東林の講学活動に深く関わった人物であった」<sup>10)</sup>のである。彼は水利改革に熱心であり、「里甲正役の銀納化」にも肯定的であったようである。<sup>11)</sup>つまり銀経済が席卷し、中間支配層たる自分たちの財政基盤が動揺しているその最中に、存立基盤を鍛えなおそうとしたのである。これが東林派の存在理由ではなかったらうか。ここではこれ以上触れ得ないが、そうした動揺して不安定な中間支配層たる東林派士人は、必死に打開策を模索する途上で、カトリック教会と西洋文明の一体となった天主教に出会ったものと思われる。親天主教、或いは反天主教であれ、天主教に対する彼らの態度は、東林派士人の存在理由と深く関わったところのものであると言



うことは許されるのではないであろうか。

#### 四

本論文の著者ハインリッヒ・ブッシュについて、ローマン・マーレク Roman Malek の "In memoriam Heinrich Busch (1912-2002) und Eugen Fefel (1902-1999)"<sup>13)</sup>に基づいて述べる。ブッシュは、一九一二年一月十七日に西南ドイツのザールランド Saarland の Bildstock に生まれた。一九三二年にザンクト・アウグスチン Sankt Augustin にて神言会に入会し、哲学を学んだ。一九三二年に初誓願を立てた。一九三五年には神学の学習のためにローマへ派遣された。一九三八年には終生請願を立て、ゲルマニウム (Germanicum)、すなわち在ローマドイツ人司祭養成神学校にて司祭に叙階された。そのまま神学の学習を続け、一九三九年に修士の学位 (Lizentiat) を取得した。同年に神言会の本部から中国の北京にあった輔仁大学に派遣された。シベリア横断鉄道を通って同年に輔仁大学に着き、中国語を学んだのち、ドイツ語の授業を担当し、中国語で西洋哲学を講じた。

ブッシュが中国に派遣された背景には、日中戦争の勃発がある。それは多くの大学の「内陸部移転を余儀なくし、近代中国における学術発展を減速させた」<sup>14)</sup>。他方経営母体の修道会の本部が日本の敵対国にないという理由により、その財産は保護される大学も出た。日本とドイツとの間には、一九三六年一月二五日に日独防共協定が調印されている。そのドイツに拠点を置く神言会が経営する輔仁大学は、後者に属した。一九四〇年九月二七日にはベルリンでイタリアが加わって日独伊三国軍事同盟が締結され、日本とドイツの結束はますます強化された。一九四一年一月二日に日中戦争はアジア太平洋戦争に拡大し、輔仁大学は大学教育に関係する人員を米国人神父からドイツ

人神父に切り替えることによって、枢軸国の大学としての体面を保った。<sup>15)</sup>しかし、すでにアジア太平洋戦争に突入する三年前の一九三八年五月には、燕京大学、輔仁大学の両大学と北京日本大使館との間に協定が結ばれ、日本人教授を招聘することに決まっております。輔仁大学・燕京大学とともに大学の存続のために対日協力の道を進まされていた。それには輔仁大学に教員や学生の抗日闘争を推進させるために大衆的な秘密組織を結成していた国民党の北京地下工作<sup>16)</sup>への対抗の意味あいもあつたろう。のみならず、輔仁大学の学長ルドルフ・ラーマン Rudolf Rahman と校務長オイゲン・ファイフェルは共産主義撲滅運動の必要性に限っては日本と目的意識を共有するところがあつたのであろう。<sup>17)</sup>

ブッシュは、対日協力を選択した輔仁大学において中国思想を研究し、論文“Hsün Yüeh 荀悦, ein Denker am Hofe des letzten Hans-Kaisers” (*Monumenta Serica*, vol. 10, [1945], pp.58-90)にて輔仁大学より修士の学位 (Magistergrad) を得た。一九四七年には、中国学の研究のために米国のニューヨークのコロンビア大学に派遣され、教授グッドリッチ (L. Carrington Goodrich (一八九四年—一九八七年)、『明代名人伝』の編者として有名) の指導を受けた。一九五三年に論文“The Tung-lin Academy and its Political and Philosophical Significance” (*Monumenta Serica*, vol. 14, [1949-1955], pp. 1-163; 但し、同誌にはブッシュの同論文の全文は掲載されていない)にて博士の学位を得た。しかし、帰るべき中国は、一九四九年には中国共産党が中華人民共和国を成立させたので、もはや戻ることは難しかった。輔仁大学にあった *Monumenta Serica* の編集室も日本に移転させることになり、ブッシュは東京に神言会の日華文化研究所 (Research Institute of Oriental Culture) の運営を任された。一九五四年には、ブッシュは *Monumenta Serica* の編集長を任された。そして一九四九年から一九五五年にわたる分を一冊にまとめるという不規則な形で、一九五五年にすでに廃刊されたように見えた *Monumenta Serica* が復刊されたのである。この

記念すべき号にブッシュの論文「東林書院とその政治的及び思想的意義」(The Tung-lin Shu-yün and Its Political and Philosophical Significance)が掲載されたのである(なお、同号にはシュライバーがコロンビア大学から一九五四年に認められた博士論文「前燕朝史」(The History of the Former Yen Dynasty)も掲載されている(三七四—三八〇頁))。

一九五七年には、*Monumenta Serica*の編集室は、神言会の経営する南山大学のある名古屋に移された。それには、一九五三年に米国から来日したブッシュを神戸港に迎えた神言会会員で民族学者の沼沢喜市が一九五七年四月に南山大学の第二代学長に就任したこともあざかったのではないか。また、ブッシュは北京の輔仁大学同様、南山大学滞在時も日本語の習得に努めたのではないか。(ブッシュの離日前半年ほどブッシュと神言会の神学院で暮らしたことがある青山玄神父の話では、ブッシュとの会話はもっぱらドイツ語であったようである)。ただ、日本語で中国思想や西洋哲学を講じ、ドイツ語を教えた形跡はないようである。しかし、名古屋では*Monumenta Serica*の編集室は、南山大学との間に軋轢が生じたらしく、そこに落ち着くことができなかった。これには複雑な事情があるようだ。ブッシュ等、*Monumenta Serica*のスタッフは依然として神言会の中国管区に属しており、日本管区に属する神言会の会員と組織との間で指揮命令系統を異にしたこともプラスには働かなかったと考えられる。

一九五七年には、南山大学の学長沼沢喜市は、神言会総会長の命令により文学部の中国文学科の学生募集を停止し、一九六二年には中国文学科を廃止した。それに符牒を合わせるかのように、ブッシュ等、*Monumenta Serica*のスタッフはこの年の暮れに米国ロサンジェルスにあるカリフォルニア大学(UCLA)に移った。この移転に際した力のあったのはシュライバーであった(*Monumenta Serica*, vol.30 表紙裏人物写真解説)。シュライバーは、一九五九年六月から一九六〇年五月まで南山学園理事、そして一九六〇年五月から一九六三年五月まで南山学園理事長

という要職にあったので、外部との移転交渉の上で力があつたろう。これに伴いブッシュ等、*Monumenta Serica*のスタッフはカリフォルニア大学の東洋語学部（Department of Oriental Studies）で教鞭を執ることになった。

中国語学中国文学科廃止とブッシュならびに*Monumenta Serica*のスタッフの米国移動との間に何等かの関係はないのであろうか。一九五八年二月一三日の南山大学評議会で、突然のように一九五九年度から中国語学中国文学科の学生募集は行なわれないと報告され、同月一八日には学長から学生会幹部に同様の説明がなされ、日華文化研究所の廃止も伝えられたようである。中国語学中国文学科には、*Monumenta Serica*のスタッフのファイフェルが専任教員として関わっていたが、この時点では辞職して非常勤講師として中国文学史の講義を継続して担当していた。ファイフェルの後任の不補充がいきなり中国語学中国文学科の廃止に急展開したわけである。*Monumenta Serica*の他の関係者、例えばエーダー等は中国語学中国文学科ではなく、人類学科所属の教員であった。また、日華文化研究所の蔵書も人類学専攻博士課程の設置基準を満たすものとして期待されており、物的資産もまた人類学科に継承されようとしていた。<sup>20</sup>*Monumenta Serica*のスタッフと中国語学中国文学科を独りでつないでいた「ファイフェルの辞職は、モニュメンタ・セリカと中国語学中国文学科の廃止に直接影響する問題であった」<sup>21</sup>のである。

南山大学史料室所蔵の一九五七年の南山大学の『学生便覧』によれば、中国語学中国文学科のスタッフは学科長・教授藤木敦実（中国語史）、教授ファイフェル（中国文学史）、助教古屋二夫（中国語文法）、助教授柴垣芳太郎（中国文学）、講師丁秀山（中国語会話）、非常勤講師近藤春雄（中国文学史）から構成されている。専任日本人スタッフの藤木、古屋、柴垣はいずれも東京外語の卒業生である。南山大学の語学教育の特徴は実用語学教育であり、東京外語の卒業生を中心とするスタッフはこの実用語学教育という目的にかなうものであったと言える。それではなおのこと学科の廃止は理解し難いものがある。

わたくしは水墨画家の三好道氏に尋ねることにした。三好氏は一九五六年の中国語中国文学科の入学生である。授業ではラジオのニュースの聴き取りなどをしたそうである。三好氏が入学した一九五六年は、中国で「百家争鳴」が提唱され、二年生の一九五七年は中国で反右派闘争が始められ、三年生の一九五八年は五月に日本で長崎国旗事件が起きた年である。この事件により中国側から日中間貿易協定の契約は破棄され、日中関係は全面的な冷却期間に入った。<sup>23</sup>この年に学生募集停止の決定が報告されたのである。聴き取りそれ自体は実用語学教育であるけれども、聴き取る内容は中国共産党政府下の中国のニュースでもあったから、それは人民中国の宣伝を兼ねたものであり、それは中国共産党政府に対立する立場にある者からすれば、イデオロギー教育としての性格を有するものとして受け取られたのではないか。

廃止の年の一九六二年までの政治情勢を見てみよう。三好氏が四年生の一九五九年には、砂川事件伊達判決が出、戦後最大の三池争議が起きた。三好氏が卒業した一九六〇年には、岸内閣のもとで新安保条約が発効し、池田内閣のもとで所得倍増政策が発表された。一九六一年には、ソ連が核実験を実施し、炭労大手一三社が合理化反対でストライキに訴えた。中国語学中国文学科廃止の年の一九六二年には、キューバ危機が起き、高崎達之助と廖承志が「日中長期総合貿易覚書」に調印しいわゆるLT貿易が始まった。<sup>24</sup>時代はブレ高度経済成長期に位置し、労働運動、言い換えれば社会主義運動が高揚した時期であった。それは日本は経済的に貧しく、保守政権に対して革新側から攻勢が仕掛けられた時代でもあった。

柴垣には『最新日中貿易通信文・読み方と書き方』（丁秀山との共著、江南書院、一九五七年）、『中国語会話入門』（丁秀山、香坂順一との共著、江南書院、一九五六年）、『中国語基本語彙』（江南書院、一九五六年）というような実用語学の著書がある。このうち同じく南山大学中国語学中国文学科専任スタッフの丁秀山との共著になる

『中国語会話入門』を見てみると、中身は単なる語学の学習というのではなく、思想教育の性格を有していた。「まえがき」には、「『やさしくて面白い会話書』、この実現のために香坂氏とわたくしはたびたび意見を交換し、いろいろと計画を練った。そしてほぼ成案のできたところで、丁氏に中国文の作成を依頼した」（一頁）とある。文面から「まえがき」の作者は柴垣である。柴垣が主導的立場にあり、香坂順一と日本語で最初に会話文を作成したのは、丁秀山が中国語に訳したようである。内容に関しては、柴垣が自覚的に構想したもののようにある。本書にはキリスト教主義教育を推進する立場とは相容れないといっても良いものが数多く見られる。そのうち特に問題とされるのは、第五〇課の「人間の力が一番大きいんだわ!」（一一二―一一三頁）である。参考までに以下に日本語の部分（一一三頁）を記す。

祖母…お前さんたちはまだ小さいからね。

姉…小さいつてことが、迷信とどんな関係があるの？

祖母…信仰つてことがまだわからないだよ。

小萃…先生が、「世界に神様はない」つて云つてたよ。

祖母…無茶を云つちやいけないよ!

姉…人類の先祖は猿で、神様じゃありません。

祖母…神様がいたからこそ、人間ができたんだよ。

小萃…ちがうよ! 神様は人間がいい加減にこしらえたものだよ。

姉…人間の力が一番大きいんだわ!

この本の姉妹編とも言うべき『新しい中国語会話』（江南書院、一九五五年）は、香坂順一と丁秀山の共著であ

るが、そこにも『新中国はたしかに幸福な社会である』ということ。それにわたくしの古い中国観は、完全に誤りでした。……それに、この社会は日本で考えているような恐ろしいものでもありませんし、また日本で宣伝されているように、自由がないということもありません（二三二―二三三頁）と社会主義中国を肯定し宣伝する文章がある。キリスト教会の立場からすれば、伝道の自由のないところにあるのは圧制であろう。さらに古屋二夫の『簡明中国語解釈』（Ⅰ）（Ⅲ）（江南書院、それぞれ一九五六年、一九五七年）もまた前二著ほどではないが、「わたくしたちはマルクスレーニン主義で武装しなければならぬ」（Ⅰ、七二頁）、「社会主義建設を自己の任務とする」（Ⅰ、七九頁）、「資本主義はまもなく消えるだろう」（Ⅰ、一二九頁）、「労働者だったら、区へ行って証明を貰えば、手術費は払わないでいい」（Ⅲ、一五二頁）、「新中国は変わった、いや変わったというより、一個の完全に新しい国家が誕生したと言ったほうがよい」（Ⅲ、一六五頁）、「小資産階級の文学は、社会の客観的現象を暴露しないばかりでなく、そのうえ客観的心理を歪曲しようとするものである」（Ⅲ、一七〇頁）などのような社会主義中国の正当性を主張する文章が載せてある。古屋の『簡明中国語解釈』は、現にある作品の文を用例として載せたものである。これらの本は例外でなく、一般的であって、当時の中国語の教科書は、全体として人民中国に關するものを必ず含んでいたのではないか。

これらは、人間は神の像に似せて神によって造られた存在とするキリスト教思想とは根本的に対立するものである。キリスト教主義教育を標榜する南山大学において、中国語の授業という形式で社会主義的無神論の内容が教えられるとすれば看過し難いものがある。しかもこれは単に南山大学に限った問題ではない。日本における中国語教育は日中学院に代表されるように、教える側も教えられる側も社会主義中国への共鳴と憧憬を有し、教える側は人民中国の熱気を伝え、教えられる側は人民中国の理想に鼓舞されたのであるから、これは単なるスタッフの入れ

替えては解決され得ない問題であった。戦前期、日本の中国侵略に協力したと言って大過ないであろう日本の中国語教育は、戦後一転して社会主義中国の宣伝に協力した観を呈したと言えるのではないか。

加えて柴垣は魯迅、老舎を講じた。柴垣の老舎研究は、後年『老舎と日中戦争』（東方書店、一九九五年）として結実する（表表紙と裏表紙の絵は三好氏が描いている）。「一九三七年は、日中両国にとって日中戦争が始まった忘れられない年であるが、筆者にとっても、東京外国語学校支那語部へ入学して中国との戦争が始まった忘れることのできない重要な年である」とあるように、中国語の学習の開始が日中戦争の勃発と重なる衝撃的なものであった柴垣にとって、戦後の中国語教育と中国学は日本の中国侵略への深い反省に支えられたものであったろう。

中国文学の授業では、魯迅、老舎等の作家の作品を原文で読むことになり、広い意味での人民のための文学を追求したそれらの作品は社会主義中国への共感を呼び起こすような影響力を持っていたことであろう。しかし、こうした授業は、人民中国に対立する立場からすれば、許されざる社会主義教育の一環として映ったのではないか。さらにまた課外活動として南山大学には中国研究会という団体が活発に活動していた。この学内の学生組織もまた、社会主義中国に対立する立場の者からすれば、社会主義中国に与する危険な学内組織として映ったのではないであろうか。

ところで人民中国誕生後、接収が決まった輔仁大学の校務長であったリグニー Harold Regney はスパイの嫌疑をかけられて四年間獄中にあった。<sup>27)</sup> 神言会の大学経営者にとって、中国共産党政府は迫害の主体であったわけである。朝鮮戦争が始まった一九五〇年には中国の教会内部から「三自宣言」が対外的に発表され、外国の伝道団体は組織的に中国から追放され、一九六〇年代後半からの文化大革命期にはキリスト教会そのものに圧力が加わった。<sup>28)</sup> キリスト教の伝道団体全体にとって、中国共産党は信教の自由を奪う紛れもない敵対者であった。



神言会の経営する南山大学の外部において社会主義運動が高揚してただけでなく、内部においてもまたこれに呼応する動きがあるとすれば、キリスト教主義教育を標榜する南山大学が内側から瓦解する恐れがある。神言会の大学経営陣は社会主義運動の盛り上がる時代状況下で、過剰防衛的に中国語学中国文学科に——たとえ実態とは異なるにせよ——そのような内部崩壊の要因を見出したのではないか。中国語学中国文学科の廃止は「キリスト教的な組織団体である経営者の抱くキリスト教的な教育理想を、より確実に達成するため」<sup>30</sup>であったからである。というのもこの中国語学中国文学科の廃止は単なる学科の廃止というものではなかった。それは本質的に南山大学中国語学中国文学科に勤める専任スタッフの事実上の解任を意図したものではなかったろうか。古屋二夫に学んだ南山大学中国語学中国文学科草創期の卒業生の愛知大学名誉教授陶山信男氏にも尋ねたところ、同氏は同学科の廃止には社会主義中国の台頭が大きかったのではないかということを示唆された。

しかし、北京の輔仁大学からやって来たブッシュ等、*Monumenta Serica*のスタッフもまた、人民中国を擁護肯定したとは考えにくい。彼等は共産党政府から追い出される形で来日したからである。他方、大学理事会は中国語学中国文学科を廃止を打ち出した以上、これ以上中国が学内紛争の火種となることを恐れて、一切の中国関係の研究施設を閉鎖移転させようと苦渋の決断を下したのではないか。

## 五

さて、ロスアンゼルスに移った *Monumenta Serica* の編集室は十年後の一九七二年の夏に、今度はドイツの Sankt Augustin に移転した。これにはその年の九月一二日に米国移転に尽力したシュライバーの逝去が関係するようである。彼の帰天は UCL A での人脈の消滅を意味したからである。<sup>(3)</sup> *Monumenta Serica* の編集室はここに拠点を定めることになった。

この Sankt Augustin の地で、ブッシュは精力的に中国のキリスト教の文献の蒐集に努めた。ブッシュは、論文「東林書院とその政治的及び思想的意義」の後、まとまったものは書いていないようである。グッドリッチ編の『明代名人伝』（一九七六年）第一巻に「顧憲成」の項目（七三六―七四四頁）を執筆しているくらいである。ブッシュは中華人民共和国成立後、輔仁大学という拠点を失った *Monumenta Serica* を継続させ、これを中国学発展の場とすることに全力を傾注したのであった。それのみならず、中国と日本の研究業績を *Revue Bibliographique de Sinologie* (Paris) 等に紹介し、西洋における中国学の一層の発展に寄与した。馮友蘭、錢穆、侯外廬等の中国、および重沢俊郎、友枝龍太郎、守本順一郎、山田慶兒、山根三芳等の日本の研究者の業績が、西洋の中国研究者に享受されるための道備えの役割をブッシュは果たしたのである（ちなみに一九五五年の同誌の創刊号ではブッシュ論文が O.B. van der Sprenkel によって紹介されている（第四四九番、一六一―一六二頁））。

ブッシュの問題関心は新儒学の観点および中国人キリスト教徒の思想家の歴史の観点から見た中国思想史であった。また彼の業績は、中国の資料に基づくところの中国キリスト教史研究であったと言えよう。この業績は、まさに開拓者的な性格を有するもの、*Pionierleistung* であった。中国キリスト教史研究における彼の方法論は、キリス

ト教に関する中国側史料と中国的対応を重視するものであって、それは Erik Zürcher の言葉を借りれば、まさに「先駆者」(forerunners) 的なものであったと言えよう。今後彼の遺著遺作が刊行されることが計画されている。ブッシュの生涯を辿るとき、そこにはヨーロッパにおける中国学の稜線がくつきり浮かび上がってくるようである。ブッシュと *Monumenta Serica* のスタッフが日本に留まることができていたならば、あるいは今日の日本における中国研究もまた違った様相を呈したかも知れない。以って憾みとすべきであろうか。

ヨーロッパにおける中国思想史研究の「先駆者」、「開拓者」としての道を歩み続けたハインリッヒ・ブッシュは二〇〇二年五月九日、ドイツのザールランドの St. Wendel にて天に凱旋した。享年八九歳であった。

注

- (1) Jacques Gernet, *Chine et Christianisme-Action-réaction*, Gallimard, 1982, p. 36, n. 2.
- (2) H. Fischer 「神言会」、『富山房』『カトリック大辞典』第二冊、一九四二年、七八四頁。
- (3) 同辞典、七八五―七八六頁。
- (4) 「輔仁大学、富山房『カトリック大辞典』第四卷、一九五四年、七八八頁。
- (5) 永井英治「南山大学文学部中国文学科廃止の諸側面」、『アルケイア——記録・情報・歴史——』第一号、二〇〇七年三月、一一〇頁。
- (6) 『白百合同窓会報』「追想」には「昭和一四年五月以降二年間、外務省第三種補給生として北京留学」(第二四号、三頁、一九七七年九月二〇日) とある。
- (7) 高田敦「編集を終えて」、後藤基巳『明清思想とキリスト教』
- (8) 研文出版、一九七九年、二六五頁。
- (9) 高瀬弘一郎『モンスーン文書と日本』八木書店、二〇〇六年、三二二頁。
- (10) 謝方校釈『職方外紀校釈』中華書局、一九九六年、六頁。
- (11) 濱島敦俊『明代江南農村社会の研究』東京大学出版会、一九八二年、四三四頁。周孔教は東林派の領袖的存在であった顧憲成、高攀龍、葉向高とも関係があった。内閣文庫所蔵『顧端文公集』巻七「中丞懷魯周公疏稿序」、同「高子遺書」巻八上「致周懷魯中丞」、同「蒼霞統草」巻六「答周懷魯」等から周孔教の民生重視の姿勢が浮き彫りにされる。
- (12) 同書、三二八頁。
- (13) 同書、一八九頁。
- (14) *Monumenta Serica*, Vol. 54, 2006, pp. 491-508. 橋本学「中国における近代的學術機関の整備に関する試論

——日中戦争勃発による研究機関の初期変動とその背景を中心に——」大学論集第三〇集、一九九九年、一三四頁。他に、橋本学「日中戦争前期・中国の学術状況に関する一考察——中国国民党治下における研究機関の動向を中心に——」大学論集第三一集、二〇〇〇年に告示された。

(15) 大塚豊「戦時下中国における欧米系大学」、阿部洋編『日中教育文化交流と摩擦』第一書房、一九八三年、三九四—三九五頁。輔仁大学との直接的な関わりは薄い、阿部洋「『対支文化事業』の研究」(汲古書院、二〇〇四年)の第四部第四章「日中戦争下の『対支文化事業』」(八六〇—九三四頁)も参考になった。

(16) 木山英雄「周作人対日協力の『顛末』」岩波書店、二〇〇四年、一四六頁。

(17) 永井英治「戦中期北京輔仁大学の日本人教員とその戦後——成り期新生大学の教員移動に関する試論——」『近代日本研究』第二三巻、二〇〇六年、二〇七—二〇八頁。(13)によれば、ファイフェルは輔仁大学では、日本の憲兵から多数の教員や学生を救済したり、また伝えられるところによれば、重慶に拠点を移した大学まで日本軍の検問の網をくぐり抜けて、卒業証書を送り届けている(五一〇頁)。表層的に対日協力と見えるものの深層は否として捉え難い。

(18) 永井英治「南山大学文学部中国語学中国文学科廃止の諸側

面」(前掲)一一〇頁。

(19) 永井同論文、一〇四頁。

(20) 永井同論文、一一〇—一一一頁。

(21) 永井同論文、一一一頁。

(22) 永井同論文、一〇七頁。

(23) 泉鴻之「長崎国旗事件」、安藤彦太郎編『現代中国事典』講談社、一九七二年、三二—三三—三四頁。

(24) 年鑑事典編集部『早わかり二〇世紀年表』朝日新聞社、二〇〇〇年、一三四—一四一頁。

(25) 藤井省三「東京外語支那語部」第二章「東京外国語学校」、第五章「日中戦争と中国語」、朝日新聞社、一九九二年。

(26) 柴垣芳太郎「老舎と日中戦争」東方書店、一九九五年、一頁。

(27) 大塚豊「現代中国高等教育の成立」、玉川大学出版部、一九九六年、六三頁。

(28) 佐藤尚子「社会主義革命後の中国ミッション系大学」『国際基督教大学学報I—A教育研究』27、一九八五年、九八—一〇二頁。

(29) 山本澄子「中国キリスト教史研究 増補改訂版」山川出版社、二〇〇六年、一七九—一八〇頁。

(30) 永井前掲論文、一一六頁。

(31) *Monumenta Serica*, Vol. 54, p. 495.

(付記) 以上、ブッシュについて略歴を記すにあたり、次の方々と機関にお世話になった。

日本カトリック教会史が専門でブッシュと同じく神言会に属しておられる青山玄神父、名古屋にある神言修道会日本管区 管区センター、神言会のクネヒト神父などである。青山神父はブッシュの生涯の前半をご教示下さった。管区センターは所属国別に神言会全会員を掲載した名簿 *CATALOGUS* を一九四〇年から二〇〇二年まで調べてブッシュの略年譜を作成して下さった。その上更にブッシュの訃報を載せた神言会総本部発行の会員誌 *ARNOLDUS NOTA* (発行者 *Curia Generalitia S.V.D.*) 二〇〇二年版 (一〇—一頁) を複写して下さった。クネヒト神父は、管区センターを介してブッシュの生涯と業績について *Roman Malek* によって書かれたモニュメンタ・セリカの独文の記事、*"In memoriam Heinrich Busch (1912-2002) und Eugen Fefel (1902-1999)"*, *Monumenta Serica*, Vol. 54 (2006), pp.491-518) をご教示下さった。以上のブッシュの略歴は、特にこの *Monumenta Serica* の記事に基づいた。また研究社『新カトリック大事典』第三巻の青山玄神父執筆の「沼沢喜市」(一五六五—一五六六頁) も参考にさせていただいた。記して謝意を表するものである。最後に独文の論文の読解に際し、ご教示を仰いだ愛知大学文学部教授土屋洋二氏、貴重なご助言を賜った愛知大学文学部教授宇佐美一博氏、翻訳を慇懃し励まして下さった京都産業大学教授小林武氏に感謝するものである。

them to leave Japan. Fr. Busch moved to Los Angeles and then to Sankt Augustin, in Germany.

Before and after WW II, researches on China were greatly affected, if not determined, by international politics. The academic career of Fr. Busch and the staff of *Monumenta Serica* reflects the complex history of China before and after WW II.

# Fr. Heinrich Busch, S.V.D. and *Monumenta Serica*

KUZUYA Noboru

## Abstract

This paper throws light on Fr. Heinrich Busch (S.V.D.) and his relationship to *Monumenta Serica*, a periodical focusing on China published by S.V.D. Research Institute. It explores the reasons why Fr. Busch went to China, moved to Japan, and then left for the United States.

1. The transfer of Fr. Busch from China to Fu-jen University—a university run by S.V.D.—was a consequence of the worsening relations between Japan and China, and Japan and Western allied countries—especially the United States. After the occupation of Peking by the Japanese army, the nationality of professors became an issue. Those who belonged to western allied states were replaced by members of the axis states. This is the reason why Fr. Busch, a newly ordained German priest, came to teach in Peking.

2. In 1945, Japan surrendered. About the same time, in China a war broke out between the Army of the National Party and that of the Communist Party. The former was defeated and fled to Taiwan. In 1949, the People's Republic of China was founded by Chinese Communist Party. For Japan, economical recovery after WW II was a slow and difficult process. The hardships of this period became a fertile ground for the development of the labor movement.

Not surprisingly, Marxism flourished in the universities, even at Nanzan. In the Department of Chinese Language and Literature, Maoism was taught by more or less sympathetic staff. This situation deeply worried the S.V.D. administrators of the university. At last, the administration decided to close the Department of Chinese Language and Literature. Though Fr. Busch and the staff of *Monumenta Serica* kept themselves out of the fry, the closure of the department compelled